PROGRAMME
REPORT

Korea

文部科学省委託平成30年度初等中等教職員国際交流事業

韓国政府日本教職員
招へいプログラム実施報告書

2018
7.10 - 7.16

文部科学省委託 平成３０年度初等中等教職員国際交流事業

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

ソウル・慶尚南道・蔚山広域市・釜山

2018 年 7 月 10 日(火) ― 7 月 16 日(月)

公益財団法人ユネスコ･アジア文化センター （ＡＣＣＵ）

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに 4 千人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人近くの教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

日本と韓国の国際交流事業としては、国際連合大学（United Nations University: UNU）による国際教育交流プロジェクトが開始され、2000 年に設立された「ユネスコ青年交流信託基金」で実施されていた「韓国教職員招へいプログラム」は同年、本事業のもとで開催されることとなりました。同大学の委託を受け、文部科学省、韓国ユネスコ国内委員会、韓国教育部の協力のもとで ACCU が運営・実施を担当してきました。事業開始からこれまで 2,000 人を超える韓国教職員を日本に招へいしています。

今年度は、文部科学省委託事業「平成 30 年度初等中等教職員国際交流事業」の一環として、2018 年 7 月 10 日から 7 月 16 日に実施された韓国政府による日本教職員招へいプログラムには、前年度に韓国教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、日韓間の教職員交流に高い関心を持ち、公募により選抜された教職員等、計 49 名が参加しました。

参加者はソウルで韓国教育開発院による同国の教育の変化や政策、韓国中等英語教育研究会より韓国のユネスコスクールの活動や持続可能な開発のための教育や地球市民教育について説明を受けたのち、2 つのグループに分かれてソウル、慶尚南道、蔚山広域市を訪問しました。各地域の教育行政機関、学校および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、韓国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日韓の教職員間、学校間の交流のさらなる発展の一助となるよう願っております。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、韓国教育部、韓国ユネスコ国内委員会、文部科学省、及び、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2018 年 12 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目　次

１．プログラム概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

２．実施内容・訪問記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

３．成果と今後への活用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

Ａグループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

Ｂグループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

事業担当者コメント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80

付録　過去のプログラム実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

プログラム写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84

１．プログラム概要

プログラム概要

1. 実施の背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、アジア太平洋地域諸国の教育と文化の分野でユネスコや諸外国関係団体と協力し、人材育成と相互交流を促進しています。2001 年から文部科学省の協力のもとで、2003 年からは国際連合大学の委託を受け、「ACCU 国際教育交流事業」として韓国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。これにより、2,092 人の韓国教職員が日本を訪問し、我が国の教職員と交流を深め、日韓両国間の相互理解と友好を育んできました。2018 年度からは文部科学省の「初等中等教職員国際交流事業」に引き継がれ、両国間の交流をさらに深化させることを目指しています。

2003 年以降、このプログラムと対をなすものとして日本教職員を韓国へ派遣してきました。招へい・派遣を含むこれら一連の交流事業は韓国政府に高く評価されることとなり、2005 年からは韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）による招へいプログラムとして日韓教職員相互交流が始まりました。韓国ではユネスコスクールの活動を中心に、持続可能な開発のための教育（ESD）や地球市民教育（GCED）をテーマに日韓教職員が相互に学び合います。日本からの派遣人数を加え、これまでに 616 人の日本教職員が韓国での交流事業に参加しています。

2. 目的・期待される成果

本プログラムは、日本の教職員を韓国に派遣し、韓国の教育・文化施設を訪問することで相手国についての理解を深め、教職員との交流を通じて、日韓両国の相互理解と友好を促進することを目的としています。また、プログラムに参加する教職員には、プログラムでの学びあいを通して日韓教職員間の持続的な相互交流を育むこと、学びを学校・地域・社会に還元し、教育現場での国際理解を促進する担い手となること、ひいては日韓両国の教育の質を高めることなどが期待されています。

3. 活動内容

(1) 小・中・高・特別支援学校や教育施設を訪問し、ESD や GCED を含む韓国の最新の教育政策・現状を学ぶ。
(2) 学校や地域の持続可能性を目指しているコミュニティにおいて活用されている ESD や GCED を探求する。
(3) 訪問先での授業見学や韓国の教職員・児童生徒との交流を通じ、日本の文化や ESD を紹介する。
(4) 文化遺産見学やホームビジットを通じ、韓国文化を理解する。

4. 日程

出発前オリエンテーション：2018 年 7 月 9 日（月）
プログラム実施期間：2018 年 7 月 10 日（火）～7 月 16 日（月）（7 日間）

日付	日程	訪問先	活動
7 月 9 日（月）	前日	羽田近郊	出発前オリエンテーション
7 月 10 日（火）	第 1 日目	羽田／ソウル	東京（羽田）出発 ソウル（金浦国際空港）到着 プログラムオリエンテーション ※韓国の教育に関する講義、ASPnet 紹介等

			開会式・歓迎晩餐会
7 月 11 日（水）	第 2 日目	ソウル	ユネスコスクール訪問
7 月 12 日（木）	第 3 日目	慶尚南道・ 蔚山広域市	［2 グループに分かれて地方へ］ 教育庁表敬訪問 ユネスコスクールや教育施設等訪問、授業見学 韓国教職員・児童生徒との意見交換や交流 歓迎晩餐会
7 月 13 日（金）	第 4 日目		
7 月 14 日（土）	第 5 日目		文化遺産訪問 各グループ情報共有会 ホームビジット
7 月 15 日（日）	第 6 日目	釜山	釜山へ向けて出発 報告会 閉会式 ワークショップ
7 月 16 日（祝）	第 7 日目	釜山／日本	出発の準備 金海国際空港出発 日本の各地へ到着（東京／大阪／福岡へ）

5.参加者

次のとおり教職員、随行員併せて 50 名を参加者とする。

(1) 2017-2018 年国際教育交流事業「韓国教職員招へいプログラム」受入機関および教育委員会、または受入れ校が推薦する教職員
(2) 2017-2018 年国際教育交流事業で他の教職員プログラムによる受入れ校（ユネスコスクール）が推薦する教職員
(3) 2018 年度初等中等教職員国際交流事業「韓国教職員招へいプログラム」受入れ予定の教育委員会や機関が推薦する教職員
(4) 公募により選抜された教職員
(5) ワークショップでの発表者
(6) 日本ユネスコ国内委員会を含む文部科学省および ACCU の職員

6. 参加資格

(1)日本国籍であること。
(2)所属長から推薦を受けた、初等中等教育教職員（教育行政職員を含む）であること。ただし、訪問団長・副団長はこれに限らない。
(3)意欲的かつ積極的に、韓国の教職員と教育経験について意見交換すること。
(4)健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
(5)E メールを用いて円滑に連絡ができること。また、Microsoft Word／Microsoft Excel などの簡単な操作ができ、所定のフォーマットに必要情報を入力し提出できること。
(6)過去に本プログラムへの参加がないこと。ただし、今回実施されるワークショップにおける発表者（1～2 名）に関しては、この限りでない。

ユネスコスクール、ESD、GCED の活動に携わっている者または高い関心を持っている者、将来にわたり韓国との具体的な教育交流の推進に寄与できる者が望ましい。

７.渡航費等諸経費

(1)KNCU が以下について負担する。

往復航空運賃：日本と韓国の国際空港間のエコノミークラス航空券

公式行事に係る韓国内の交通費、宿泊（シングルまたはツインルーム)、食事：但し、公式行事のない日の夕食については、支給される夕食代（1 日当たり 20,000 ウォン）から参加者が支出することとする。

(2)ACCU が以下について負担する。

日本国内交通費（ACCU 規定に準ずる）

①出発前日の自宅最寄駅からオリエンテーション会場最寄駅までの交通費

②出発日の宿泊先から羽田空港までの交通費

③帰国日の到着空港から自宅最寄駅までの交通費の定額

出発前日（7 月 9 日）の宿泊

(3)各参加者は下記について負担する。

海外旅行損害保険：各参加者は、プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において、海外旅行損害保険に加入しておくこと。

上記（1)、(2）以外の諸経費

(4)旅券と査証について

旅券（パスポート)：入国時に 3 ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。

査証（ビザ)：一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

8. 通訳

プログラム期間中は、日本語‐韓国語間の通訳あり。

プログラム日程

日にち	時間	内容	宿泊
7/9(月)	13:30-13:50	オリエンテーション受付	京急ＥＸイン羽田 〒144-0043 東京都大田区羽田５丁目 5-14 Tel：03-3742-3910
	14:00-17:40	オリエンテーション、ホテルチェックイン	
	19:00-21:00	懇親会	
7/10(火)	09:15	羽田空港出発(KE2712)	世宗ホテル ソウル特別市中区退渓路 145 Tel：82-2-773-6000
	11:45	金浦国際空港到着	
	14:45	ホテル到着、チェックイン	
	16:00-16:20	プログラムオリエンテーション	
	16:20-17:30	韓国の教育についての講義、 韓国の ASPnet の紹介	
	18:00-20:00	開会式及び歓迎晩餐会	
7/11(水)	Ａグループ		
	08:40	各自チェックアウト、ホテル出発	
	09:30-14:00	海成(ヘソン)国際コンベンション高等学校訪問 昼食:学校給食	
	14:40	ホテル到着および休憩 (夕食:個人)	
	Ｂグループ		
	09:15	ホテル出発	
	10:10-14:00	貞媛(ジョンウォン)女子中学校訪問	
	15:00	ホテル到着及び休憩 (夕食:個人)	
7/12(木)	Ａグループ		プルマンアンバサダー昌原 慶尚南道昌原市義昌区原一大路 332 Tel：82-55-600-0725
	07:30	ホテル出発	
	13:00-14:00	昼食	
	15:40	ホテル出発	
	16:00-17:30	慶尚南道教育庁訪問	
	17:30-19:30	地域歓迎晩餐会	
	Ｂグループ		ロッテホテル蔚山 蔚山広域市南区三山路 282 Tel：82-52-960-4103
	07:30	ホテル出発	
	13:20-14:20	昼食	
	15:00	ホテル出発	
	15:00-17:00	蔚山広域市教育庁訪問	
	18:00-20:30	地域歓迎晩餐会	
7/13(金)	Ａグループ		プルマンアンバサダー昌原 慶尚南道昌原市義昌区原
	08:30	ホテル出発	

	09:00-12:50	昌原竜湖(ヨンホ)高等学校訪問 昼食:学校給食	一大路 332 Tel：82-55-600-0725
	13:40-16:20	大清(テチョン)中学校訪問	
	16:30-17:30	情報共有会(場所:大清中学校)	
	18:00	ホテル到着及び休憩 (夕食:個人)	
	B グループ		ロッテホテル蔚山 蔚山広域市南区三山路 282 Tel：82-52-960-4103
	09:00	ホテル出発	
	09:40-12:30	幸福(ヘンボク)学校訪問 昼食:学校給食	
	13:90-15:40	彦陽(オンヤン)小学校訪問	
	15:40-16:40	情報共有会(場所: 彦陽小学校)	
	17:20	ホテル到着及び休憩 (夕食:個人)	
7/14(土)	A グループ		プルマンアンバサダー昌原 慶尚南道昌原市義昌区原一大路 332 Tel：82-55-600-0725
	08:00	ホテル出発	
	09:00-09:40	文化探訪-大成(テソン)洞古墳博物館	
	09:50-10:30	文化探訪-金海首露(スロ)王陵	
	10:40-11:00	文化探訪-鳳凰(ボンファン)洞遺跡貝塚展示館	
	11:50-12:50	昼食	
	13:20-13:50	昌原歴史民俗館	
	15:50-16:00	ホストファミリーとの対面式	
	16:00-20:00	ホームビジット	
	B グループ		ロッテホテル蔚山 蔚山広域市南区三山路 282 Tel：82-52-960-4103
	08:30	ホテル出発	
	09:20-11:20	文化探訪-岩刻画(アムガクファ)博物館、岩刻画及び盤亀台(パングデ)	
	11:40-12:40	昼食	
	13:00-14:00	文化探訪-太和江(テファカン)エコセンター	
	15:30	ホテル出発	
	15:50-16:00	ホストファミリーとの対面式	
	16:00-20:00	ホームビジット	
7/15(日)	A グループ		イビスアンバサダー釜山シティセンター 釜山広域市釜山鎮区中央大路 777 Tel：82-51-930-1100
	09:00	ホテル出発	
	B グループ		
	08:30	ホテル出発	
	両グループ		
	10:30	ホテル到着及び報告会の準備	
	11:00-11:30	報告会	
	11:30-12:00	閉会式	
	12:00-13:30	昼食	

	14:00	ホテルチェックイン及び休憩 (夕食:個人)	
7/16(月)	06:00	関西/福岡/成田行きの搭乗者ホテル出発 (金海国際空港へ移動)	
		金海国際空港到着 3 路線に分かれて帰国 金海～関西　KE731　08:35–10:05 金海～福岡　KE783　09:15–10:05 金海～成田　KE715　09:25–11:35	

【オリエンテーション講師】

文部科学省 生涯学習政策局 参事官付 外国調査係
専門職　田中光晴

【韓国側随行者・通訳】

韓国ユネスコ国内委員会(KNCU) ：
ソン・ジョンジン ユネスコスクールチーム長
イム・シヨン主任専門官
キム・ミンジョン専門官
カン・ソルミン専門官

通訳：
パク・ミンア通訳者
イ・ジェミン通訳者
ヤン・ヘウン通訳者
ユ・ギョンドク通訳者

参加者リスト

A グループ

No.	氏名	所属	職名	担当係
A-01	吉田　信也	奈良市立一条高等学校（奈良県）	校長	副団長
A-02	青山　理恵子	愛知県立刈谷北高等学校（愛知県）	教諭	出しもの
A-03	牛丸　千枝	高山市立松倉中学校（岐阜県）	教諭	記録
A-04	太田　明夢	寝屋川市立第十中学校（大阪府）	教諭	記録
A-05	太田　竜一	市川中学校・市川高等学校（千葉県）	教諭	記録
A-06	菊地　英明	東京学芸大学附属国際中等教育学校（東京都）	教諭	記録
A-07	櫛田　真一郎	愛知県立千種高等学校（愛知県）	教諭	記録
A-08	佐藤　亜矢香	埼玉県立富士見高等学校（埼玉県）	教諭	報告会原稿作成
A-09	下井　慈	長野県飯田市立旭ヶ丘中学校（長野県）	教諭	庶務
A-10	高倉　洋美	大牟田市教育委員会事務局（福岡県）	指導主事	記録
A-11	西村　隼一	兵庫県立川西明峰高等学校（兵庫県）	教諭	記念品
A-12	西嶋　桃子	麹町学園女子中学校高等学校（東京都）	教諭	写真
A-13	畠山　尚之	大阪府立北淀高等学校（大阪府）	教諭	会議進行
A-14	中垣　尚子	三重大学教育学部附属中学校（三重県）	教諭	報告会原稿作成
A-15	彦坂　永利子	愛知県教育委員会（愛知県）	課長補佐	記録
A-16	堀田　正明	池田町立池田中学校（岐阜県）	主幹教諭	写真
A-17	前田　愛咲美	静岡県立韮山高等学校（静岡県）	教諭	記録
A-18	松岡　由美子	埼玉県立浦和西高等学校（埼玉県）	教諭	記録
A-19	山城　史人	静岡市立玉川中学校（静岡県）	教諭（教務主任）	写真
A-20	山本　英志	東大阪市立縄手中学校（大阪府）	教諭	報告会資料作成
A-21				
A-22	吉岡　静	筑波大学附属坂戸高等学校（埼玉県）	教諭	グループ報告書
A-23	吉川　大地	岡山龍谷高校（岡山県）	常勤講師	記念品
A-24	西　明夫	文部科学省（東京都）	地方教育行政専門官	
A-25	岡野　晃一	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（東京都）	プログラム・オフィサー	

B グループ

No.	氏名	所属	職名	担当係
B-01	伊井　直比呂	公立大学法人大阪府立大学（大阪府）	准教授	団長
B-02	浅野　智宏	岡山市立三勲小学校（岡山県）	教諭	報告書原稿作成
B-03	有田　桃子	徳島県板野郡藍住町立藍住北小学校（徳島県）	教諭	記録
B-04	飯干　望	横浜市立永田台小学校（神奈川県）	教諭	出しもの
B-05	生杉　真美	徳島県阿南市立桑野小学校（徳島県）	教諭	会議進行
B-06	稲垣　顕子	八千代市教育委員会（千葉県）	指導主事（主査）	報告会原稿作成
B-07	大塚　厚	奈良市立春日中学校（奈良県）	教諭	記念品
B-08	小吹　耕平	千葉県八千代市立西高津小学校（千葉県）	教諭	記念品
B-09	梶山　茜	大阪市立晴明丘小学校（大阪府）	教諭	記録
B-10	加藤　佳子	豊田市立加納小学校（愛知県）	教諭	記録
B-11	口岩　竜馬	石狩市立南線小学校（北海道）	教諭	グループ報告書
B-12	小出　瑞紀	千葉県立千葉盲学校（千葉県）	教諭	記録
B-13	杉山　千夏	山口県立下関総合支援学校（山口県）	教諭	写真
B-14	倉田　奈生子	斜里町立朝日小学校（北海道）	教諭	記録
B-15	辻　真実	千葉県八千代市立大和田小学校（千葉県）	教諭	記録
B-16	長尾　健太郎	愛知県立みあい特別支援学校（愛知県）	教諭	会議進行
B-17	住田　昌治	横浜市立日枝小学校（神奈川県）	校長	記録
B-18	西原　隆博	静岡県伊豆市立天城中学校（静岡県）	教諭	記録
B-19	林　英樹	岐阜県揖斐郡池田町立温知小学校（岐阜県）	教諭	写真
B-20	廣川　貴志	北海道旭川市立近文第一小学校（北海道）	教諭	報告資料作成
B-21	藤田　有記	熊野町立熊野第一小学校（広島県）	教諭	写真
B-22	森田　真好	多摩市立愛和小学校（東京都）	主幹教諭	記録
B-23	吉原　康予	奈良市教育委員会事務局（奈良県）	指導主事	庶務
B-24	尾形　優介	文部科学省（東京都）	係員	
B-25	伊藤　妙恵	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（東京都）	プログラム・スペシャリスト	

※両グループとも、所属・職名は当時のまま掲載している。

プログラム関係機関

＜日本側機関＞

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan

駐大韓民国日本国大使館/Embassy of Japan in Korea

＜韓国側機関＞

韓国ユネスコ国内委員会/Korean National Commission for UNESCO

韓国教育部/Ministry of Education, Republic of Korea

慶尚南道教育庁/Gyeongsangnamdo Office of Education

蔚山広域市教育庁/Ulsan Metropolitan Office of Education

駐日本国大韓民国大使館/Embassy of the Republic of Korea in Japan

＜訪問校＞

海成国際コンベンション高等学校/Haesung International Convention High School

昌原竜湖高等学校/Changwon Yongho High School

金海大清中学校/Daecheong Middle school

貞媛女子中学校/Jungwon Girls' Middle School

蔚山幸福学校/Ulsan Haengbok School

蔚山彦陽小学校/Ulsan Eonyang Elementary School

＜企画・実施・運営＞

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

２．実施内容・訪問記録

7 月 9 日（月）出発前オリエンテーション（東京）

グループワークをする参加者の様子

出発の前日、羽田空港近くにあるタートルホールにてオリエンテーションが実施された。

文部科学省 生涯学習政策局参事官（連携推進・地域政策担当）付専門職 田中光晴氏より「韓国の教育事情」に関して講義が行われ、参加者は韓国の教育政策と近年の教育動向や課題について学んだ。

また、自己紹介、ACCU による注意事項に加え、グループワーク、団長の伊井直比呂氏、自校の教員を積極的に海外に派遣している住田正治氏より、質の高い国際交流や教員交流の意義についてお話しいただいた。最後は、レセプションで披露する歌の練習を参加者全員で行った。

プログラム参加者の興味・関心

- キャリア教育、エネルギー教育
- 国際理解教育
- 世界遺産や地域の文化財等に関する教育
- 食育
- 人権教育
- 国際理解教育
- ICT 教育
- 持続可能な開発に関する価値観
- ネットワーク型共同実践のシステム開発
- 福祉学習 等

講義「韓国の教育事情」Q&A（抜粋）

Q：授業のスタイルについて、教師が子どもに考えさせる授業、または講義形式が多いのか。
A：視察した学校では、ICT を使った授業でアニメーションを子どもに見せて考えさせる内容が多いように見受けられた。

Q：道徳の授業とテストはどのようなものか。
A：小学校でいうと「正しい生活」の授業があり、社会と道徳が合わさった内容である。低学年では国旗の描き方や我々の民族はどういうものかといったことを習う。テストは選択形式というよりは記述評価である。

Q：地域的な格差に対する政策はどのようなものか。
A：地域の教育行政の長は首長とは別で、住民の直接選挙で選ばれ、人事や予算を握る権力をもっている。多くの教育長は弱者に手厚い政策をとっており、北から脱北した子どもや外国人労働者の子どもに対応した取り組みを重視している。

7 月 10 日（火）プログラムオリエンテーション（ソウル）

韓国教育開発院初等中等教育研究本部シン・チョルギュン部長による韓国の教育に関する講義

プログラムの初日、韓国ソウルの世宗ホテルにて KNCU 主催によるプログラムのオリエンテーションが実施された。

韓国教育開発院 初等中等教育研究本部シン・チョルギュン部長より「韓国における教育の変化と主な政策」というテーマで講義が行われ、参加者が韓国の教育概要と近年の教育改革等について学ぶ機会となった。

ついで、韓国中等英語教育研究会 ユ・チョル会長から「韓国の ASPnet 活動と ESD/GCED」について講義が行われ、韓国の ESD/GCED の現状について理解を深めることができた。

プログラム参加者の興味・関心

- 学区制
- 教職員に対する教育
- 教育改革と大学入試の関係
- 学生の幸福度
- テストがなくなったときの評価方法
- 中学生対象の自由学期制
- 学生のネットワーク分析
- 高校生対象の学校単位制
- 多様な教科・科目の開設
- 教育の包容力の強化

講義「韓国における教育の変化と主な政策」Q&A（抜粋）

Q：政権で教育政策が変わるというのは、これまでの政策を推進してきた人たちからの批判・反発等はなかったのか。
A：政策に対するコンセンサスを形成するのは重要である。現場の反発はあったが、共感する人も多くいた。現場の教職員がどのような考えをもってやっているのか、考えを融合させる努力が大事であった。

Q：学区制の中、どのように興味関心を引く授業を行っているのか。また、教職員のスキルアップはどのように対応しているのか
A：学校の自主的な判断で自由学期制・高校単位制を選択することができる。また外部からの支援を仰ぎながら、運営に教職員が関与することでスキルアップも図っている。

7 月 10 日（火）歓迎晩さん会（ソウル）

韓国ユネスコ国内委員会のキム・グァンホ事務総長の挨拶から会が始まり、初めて会う先生方との楽しい会話が心に残る思い出となった。会話では、スマートフォンの翻訳アプリを使用される先生も多く、なるべくお互いの国の言葉でコミュニケーションを図ろうという様子が見受けられた。日本の訪問団が韓国語を交えながら、「花は咲く」を披露すると、韓国側は挨拶時に日本語の歌を聞かせた。本プログラムのスタートにあたって、このような時間を過ごすことはとても有意義であり、これからのプログラムを大いに期待し、楽しみで胸が高まる思いであった。

全員で「花は咲く」を披露

A グループ

7 月 11 日（水）海成国際コンベンション高等学校訪問（ソウル）

訪問スケジュール

9:40 – 10:00 歓迎式・学校紹介
10:05 – 10:35 英語・日本語授業参観
10:40 – 11:30 日本文化授業
韓国料理作り体験
11:30 – 12:30 昼食
12:30 – 13:00 学校見学
13:00 – 13:50 日韓教職員懇談会
13:50 – 14:00 記念撮影

着付けとお茶の体験を通して日本の文化を経験する文化授業の様子

学校・機関の特色

本プログラム最初の訪問先は、ソウルの東大門区に位置する海成（ヘソン）国際コンベンション高等学校であった。同校は。創立 60 周年を迎える韓国初のコンベンション分野の私立女子特性化高校である。

Q&A（抜粋）

Q：外国語の達成レベルは。
A：選抜の英才クラスは目標があり、TOEIC については、1 年生 500、2 年生 600、3 年生 700。日本語検定ならびに中国語 HSK は 4 級となっている。

Q：放課後、教員と生徒はどのように過ごしているのか。
A：主に金曜日の 6・7 時間目を利用して、月間 70 時間ほどクラブ活動を実施している。

Q：教員の情報共有化手段と研修体制について教えてほしい。
A：60 名の教員が在籍しているが、毎週月曜日に前週の振り返り、木曜日に次週について話し合っている。毎日は昼休み時間に職員会議が開かれ、教員間はメールを使って緊密に連絡取りあっている。研修は年に 1 回全員二泊三日で実施している。

7 月 12 日（木）慶尚南道教育庁表敬訪問・歓迎晩さん会（昌原）

慶尚南道教育庁への表敬訪問

慶尚南道教育庁では、キム・サングゥオン教育局長より歓迎のご挨拶があり、まず教育庁のPR動画を視聴した。「学びが楽しい学校、共に育てる慶尚南道」をビジョンに掲げる慶尚南道では、教育監の強力なリーダーシップのもと、共に学び未来を切り開く民主市民教育を目標に、持続可能な教育と地球市民活動教育を推進していた。

またソン・ガユン事務局長からユネスコスクールの「アヒルとタニシを使ったエコ教育活動」の活動紹介がなされた。環境学習の一環で、アヒルは虫を、タニシは雑草を食べることで、農薬を使わない環境にやさしい農法をみるという教育活動である。

教育庁の建物には、セウォル号で亡くなった檀園高の生徒たちに捧げる詩が、ひとり一人に掲げられていた。非常に痛ましい事故であり、二度とこのような事故が起きてほしくないと強く願った。表敬訪問終了後は、教育庁近くで歓迎晩さん会が開催され、韓国の教職員の方々による心温まるおもてなしがなされ、日韓教職員の交流を図ることができた。

Q&A（抜粋）

Q：教育監はどういう方が就任されるのか。
A：5 年おきに開催される住民の直接選挙で選ばれる。慶尚南道における教育行政のトップで財政から方針まですべての権限を有する。

Q：「楽しい学校」のために最も重要なことは何か。
A：現在、生徒中心・体験中心で授業を執り行うことに力点を置いているが、生徒がプロジェクトを完成する過程での学びは貴重であることから、重要なのは生徒が直接参加することだと考えている。

7 月 13 日（金）午前 昌原竜湖高等学校訪問（慶尚南道昌原市）

訪問スケジュール

9:10 – 9:30 歓迎式・学校紹介
9:40 – 10:10 学校見学
文化授業
10:20 – 11:00 韓紙うちわ・五味子花菜作り
11:10 – 11:50 日韓教職員懇談会
特別講演
11:50 – 12:30 昼食
12:30 – 12:50 記念撮影

五味子花菜作り体験

学校・機関の特色

昌原竜湖高等学校は、現代自動車や造船会社がある昌原市内中心部に位置する男女共学の高等学校である（但し、クラスは別々）。そのため、将来社会に出て活躍できる人材育成に力を入れている。

参加者の感想（抜粋）

●学校の重点課題は「学びが生まれる幸せな授業の実現」であり、プロジェクト活動の成果や、日々の疑問質問をQノートやQボードを活用して掲示し、全校で共有をしているという点が印象的であった。

●高校 1 年生の男女 200 名を対象に日本の高校生の生活を通して、日本の教育の紹介をする特別講義も行った。どの授業でも生徒は積極的に参加し、廊下でも「こんにちは」「愛してます」と話しかけてくれた。日本という国や文化に興味を抱いてくれていることが伝わってきて、もっとたくさんのことを伝えたいという気持ちになった。

●先生方との意見交換はいくつかの小グループに分かれ、後半は昼食を交えながら行われた。授業について、大学入試についてなどお互いが聞きたいことについて、じっくりとリラックスした雰囲気で話し合えたこともあって、相互理解を深めることができた。

7 月 13 日（金）午後 金海大清中学校（慶尚南道金海市）

訪問スケジュール

13:40 – 14:25 歓迎式・学校紹介
14:35 – 15:20 学校見学・授業参観
15:30 – 16:10 日韓教職員懇談会
16:10 – 16:20 記念撮影
16:30 – 17:30 日本教職員評価会

液体窒素を使った化学実験の授業参観

学校・機関の特色

大清中学校は 2011 年に開校し、2016 年にユネスコ学校に指定された比較的新しい学校で、「創意　奉仕」を校訓に、「ビジョンを持って(魂)、いつも新たになろうとする努力で(創)、他人と共に生きる(通)人を育てる」という教育目標を掲げている。

大清 3 運動(カン・ミ・ゼ)では、自ら先に配慮し、先に譲歩し、友達と一緒に分け合う生活を通じて皆が共に暮らせる社会を作っていこうとする姿勢を育み、「人格 UP!健康 UP!」と称する、健全で楽しい学校生活ができるよう運動の機会も設けている。さらには、「トン（通）トン（通）トン（通）」という参加型科学授業の先導学校として未来社会で要求される創造的な人材の育成を行うなど、非常に特色ある教育を実施している。

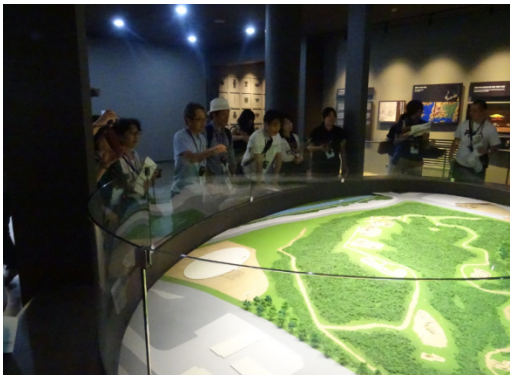
Q&A（抜粋）

Q：生徒会での人権活動は。
A：12 月 10 日の世界人権 day にあわせて前後 1 週間人権について学校全体で取り組んでいる。また授業でいじめ撲滅劇を演じ、それを DVD にて配布している。

Q：第四次産業革命に向けての対応は。
A：もともとマークシート方式が主流であったが、論理的な力の育成が必要なので、数学では 100 点満点中 72 点を記述式としている。

Q：Be yourself の中の読書 50 冊で何か工夫はあるか。
A：読んだ内容をポップにして飾り、また自分たちが読んだ本を紹介しあいディスカッションし、どの本が一番読みたくなったかの投票を行うビブリオバトルという試みを実施している。

7 月 14 日（土）午前① 大成洞古墳博物館（慶尚南道金海市）



ジオラマの説明を聴く日本教職員

金海（キメ）市の中心に位置する 22m ほどの小高い丘が大成洞古墳である。1990～92 年の発掘調査により、3 世紀後半～5 世紀にかけて形成された金官伽耶の支配者集団による共用墓地であることが明らかとなっている。

この遺跡は、文献資料が乏しい古代伽耶諸国の実態を知る上できわめて重要な役割を果たしている。

墳丘では 130 以上の墓が発掘され（現在も発掘中）、多くが木棺墓である。人や馬を殉葬する風習があり、多くの人骨・獣骨が出土している。

7 月 14 日（土）午前② 金海首露王陵見学

王陵前でガイドさんの説明を聴く様子

1 世紀に金官伽耶を建国したと伝えられる首露王の陵墓。朝鮮時代の 16 世紀に陵として整備された。首露王は韓国最大の氏族である金海金氏の租とされており、一種の聖地となっている。

王陵は高さ 6m、直径 22m の芝に覆われた美しい円墳である。王陵の周辺は柵で囲われて入れないようになっている。石柱や動物の石像が陵の周囲に配置されており、神聖な雰囲気を漂わせていた。

7 月 14 日（土）午前③ 鳳凰洞遺跡貝塚展示室見学

高床式倉庫の前で記念撮影

金海市に位置する古代遺跡。伽耶時代の住居跡と貝塚が隣接しており、あわせて史跡として整備されている。

竪穴式住居や高床式倉庫が復元されており、日本と共通の基盤を持つ稲作農耕文化が形成されていたことがうかがえる。

付近には、屋根がついた貝塚の展示館がある。貝塚の一部を縦に掘り、断面をガラスで覆うことで、貝殻が堆積している様子を眺めることができるようになっている。数メートルに渡り、牡蠣を中心とする貝殻が層をなしている

7 月 14 日（土）午後① 昌原歴史民族館見学（慶尚南道昌原市）

民族館デッキにてポーズ

伝統家屋を保存した「昌原の家」の付近に建設された展示館。先史時代から現代までの昌原の歴史を学ぶことができる。

1階は昌原地域の先史から現代までを概観できるよう、遺物やパネルが並べられている。展示物はさほど多くはないが、展示方法が工夫されており歴史の流れをつかむことができる。もっとも興味深かったのは、現代の部分である。朴正熙大統領の産業都市を造るという号令のもと、キャンベラをモデルとした計画都市として建設されたとのことで、昌原の近代的な街並みの理由を知ることができた。現在は馬山・鎮海地域とも合併し、100 万都市となっている。

7 月 14 日（土）午後② ホームビジット（慶尚南道）

ホテルでの記念撮影

宿泊しているプルマン・アンバサダーホテルのロビーにホストファミリーと 16 時に待ち合わせをして、二人一組で韓国の各家庭との時間を過ごした。予定では 20 時にホテルに戻ることになっていたが、各家庭での会話が非常に盛り上がったということもあって、ホテル到着が 22 時過ぎという組もあった。一般家庭の日常を体験させて頂いたり、観光地を巡ったりする家庭など様々であったが、日本の遊びを紹介したりして過ごした家庭や「家庭の味」を感じさせる手作りご飯をご馳走してくださる家庭など、韓国の方との心温まる交流をすることができ、相互理解を深めることできるなど非常に有意義であった。

B グループ

7 月 11 日（水）貞媛女子中学校訪問（ソウル）

訪問スケジュール

10:20 – 11:05 歓迎式
11:15 – 12:00 文化授業＆学校見学
12:00 – 12:50 昼食（学生食堂）
13:00 – 13:50 懇談会
14:00 学校出発

韓国の生徒によさこいソーランを
教えている様子

学校・機関の特色

「制服を着た芸術家」を育てる文化芸術教育プログラムをはじめ、生徒中心の国際理解や国際交流活動等、多様で弾力的な教育がおこなわれているのが特徴である。「誠実で美しく賢く」を校訓とし、自律的で道徳的な人間教育、未来志向的な人材育成教育、助け合い認め合う明るい学校を目指している。

Q&A（抜粋）

Q: 世界市民教育における部活動は、日本の中学校・高等学校の部活動、日本の小学校のクラブ活動と全然違うものなのか。
A: 名前が違うだけで、日本の部活動やクラブ活動のように、生徒が好きなことを集まって行い、多様な活動をしている。本校では、学校で行われている公式的な部活動は 37、生徒が自立してつくる部活動は 22 ある。いずれも、生徒の希望によって発足している。

Q: iPad をどのように活用しているのか。
A: スマートパッドは学校に 50 台あり、必要に応じて先生が申請して使う。また、各教室に wifi ルーターが設置されているため、教員が自分のスマホやスマートパッドをそのまま教室のスクリーンに投影させることができる。また、教科別に先生が集まり、規律よく使うよう、相談しながら対応している。

Q: ICT を活用したスマート教育に関する教員向けの研修や勉強会はあるか。
A: 教育庁でたくさんの研修が実施されているので、教員は申請し教育を受けている。夏休みを利用して学校外で研修を受ける場合、サイバー研修としてビデオ研修を校内で受けることもある。

7 月 12 日（木）蔚山広域市教育庁表敬訪問（蔚山広域市）

訪問スケジュール

15:30 – 15:45 参加者の紹介、挨拶
15:45 – 16:30 蔚山教育の紹介、Q&A
16:30 – 16:50 記念品交換、記念撮影
16:50 – 18:00 閉会、移動
18:00 – 20:30 歓迎晩餐会

蔚山広域市教育長への表敬訪問

学校・機関の特色

蔚山広域市教育庁では、「一人の子どももあきらめない」方針を掲げ、様々な夢、教育水準、家庭環境をもつ一人ひとりの子どもの自己実現と、教育福祉に最善を尽くす意思が盛り込まれている。ユネスコ関連教育としては、①ユネスコスクールの運営、②地球市民教育学校の拡散、③持続可能な発展のための教育の充実化、④共にする多文化教育推進を中心に実施されている。

Q&A（抜粋）

Q：ESD や GCED はウルサンのすべての学校で実践されているのか知りたい。
A：率先する ESD 教育・教室を掲げているが、これは教育庁から出向いて教育を行うもので、250 のクラスを指定し、関連機関で構成された講師グループがクラスや部活動に専門の派遣され、ESD クラスが運営されている。

Q：「一人の子どももあきらめない」ウルサン教育のビジョンは昔からあったのか。
A：選挙によって 7 月 1 日に新しい教育監が就任したが、その選挙活動のマニフェストに掲げらたもので、ウルサンのビジョンとしては最新である。

Q：外国籍の児童生徒数はどこの国からが多いのか、ある学校に集中しているのか。
A：ウルサンには 2,804 人が異文化家庭の子どもで、ベトナムからが一番多く 1,093 人、次に中国からで 568 人である。日本からは 149 人いる。これらの児童生徒は一般校に通っている。

Q：ESD を推進している学校にどのように ESD を浸透させているのか。
A：ESD を生涯教育として位置づけ、特に文化共同体や生態系に対して、エネルギー節減、生ゴミを減らすなど「正しい生活習慣」を身につけさせ、責任ある市民を形成しようと試みている。また、250 の教育プログラム運営や 100 の部活動等、制度として ESD 教育の推進を実践している。さらに、教育庁や学校が連携してさまざまなプログラムが提供されている。

7 月 13 日（金）午前① 幸福学校訪問（蔚山広域市）

訪問スケジュール

09:40 – 10:00 学校紹介
10:00 – 11:00 学校見学＆授業参観
11:00 – 11:30 昼食（1 階食堂）
11:30 – 12:20 日韓教師懇談会
　　記念撮影
12:30　　学校出発

教材作りのための部屋

学校・機関の特色

幸福学校は、「自立・奉仕・信頼のこころを培う幸せな教育」をビジョンにもつ、2014 年に開校した、知的障害特別支援学校である。第二代キム・ジョンジャ校長はきれいに整った学校を目指している。校長の理念通り、学校は掃除が行き届いており、どこもピカピカの状態であった。東京都立永福学園と姉妹提携をしており、日本とのつながりをもっている。

カフェ、美容、洗濯等さまざまな実践教育が提供されており、教育庁指定の職業訓練校としても実績をあげている。

Q&A（抜粋）

Q：日本では人間関係等の理由で仕事に就いても、辞める人が多いが、韓国はどうだろうか。
A：就職よりは仕事を持ち続けることが大切と考えているため、保護者や企業と連携して、離職を未然に防いでいる。とは言え、辞めてしまう場合もある。しかしながら、その経験から学ぶことはあるので、その経験を活かすように指導する。学校としては 6～7 割の生徒が卒業できるように目指している。

Q：卒業後も学校がサポートするのだろうか。
A：基本的に卒業後 3 年まではサポートする。3 年間問題なければ、その先も問題ないだろうという認識で対応している。

Q：障害をもつ子どもの就職はどのような状況だろうか。
A：公共機関との連携がまだ整っておらず、障碍者を雇用する企業が少ない状況であり、就職率は低い。

Q：学校の予算執行について聞いてみたい。
A：韓国では学校や部ごとに使える予算がある。特別教育のクラスを作るの予算、その運営のためにも使える予算があり、教師の裁量で執行できる。

7 月 13 日（金）午後② 彦陽小学校訪問（蔚山広域市）

訪問スケジュール

13:10 – 13:50 歓迎式
14:00 – 14:40 学校見学＆授業参観
15:00 – 15:40 日韓教師懇談会
15:40 – 16:40 日本教職員情報共有会
16:40 学校出発

プログラミングをする児童の様子

学校・機関の特色

1906 年に設立され、「実力を伸ばし、愛し合いながら夢に向かってはばたくグローバルリーダー」となる人材育成を目標にしている。ウルサン教育庁指定の「創意融合の先導学校」「言語文化改善の先導学校」「ソフトウェアの先導学校」である。訪問時はプログラミング（coding）の授業を見学した。タブレット PC は 60 台あり、ロボットも何種類か常備している。

Q&A（抜粋）

Q：学内外の人が出入りできる素晴らしい歴史館があるが、安全性をどのように確保しているのだろうか。
A：見学には事前申請が必要である。出入口は一つで、監視体制を徹底し、防犯に努めている。

Q：スマートフォンの取り扱いについて教えてほしい。
A：1 年生からスマートフォンを持っている。危険度テストを実施し、生徒が高いレベルと判定された場合は、特別支援教育を受けることになっている。

Q：安全教育・環境はどのようなものか。
A：月 1 回、教室ごとに点検し、安全性を確認している。地震や火災訓練を行い、安全に対する知識や行動について学ぶ機会を設けている。また、セウォル号事件の後は、3、4、5 年生は水泳の授業をするようになった。さらに、防犯カメラが設置されており、地域の監視センターにつながっているため、万が一侵入者がいた場合には、監視センターから警備員が駆け付けるようになっている。それとは別に学校にも警備員が常駐している。

Q：カラオケボックスをはじめ、子どもを楽しませる施設はどのように調達しているのか。
A：カラオケボックスは寄付により設置された。卓球台や卓球用具は前校長が購入した。

7 月 14 日（土）午前 岩刻画博物館・岩刻画・盤亀台見学

ガイドさん（右）の説明を聞く

岩刻画を背景に記念撮影

2008 年に開館した韓国唯一の岩刻画博物館である。蔚山の代表的な川である太和江上流の岩壁にある盤亀台岩刻画（パングデアムガクファ）は、横約 10 メートル、縦約 3 メートルの亀の甲羅のように見える岩の上に鹿、虎、猪などの陸地動物や狩りの場面、鯨、オットセイ、亀などの海の動物や漁夫の姿など 75 種類 200 点あまりが描かれた岩壁画である。先史時代の人々の生活と風習を推察できる貴重な資料として 1995 年に韓国の国宝に指定されている。岩刻画博物館には、盤亀台岩刻画の実物大模型、岩刻画遺跡を紹介する立体映像、先史時代の生活の様子がわかる模型や写真などが展示されている。

訪問団はガイドの説明を受けながら館内を回り、その後博物館周辺を見学しながら最後には実際の岩刻画を背景に記念撮影をした。

7 月 14 日（土）午後① 太和江エコセンター

水槽の中を観察

ガイドさん（右）の説明を聞く

太和江（テファガン）は、蔚山を東西に流れる長さ 47.54 キロメートルの川である。蔚山の急激な産業化にともない工場からの排水や排気などによる水質汚染が問題になったが、官民による復元運動が進められ、約 10 年で 6 等級水から 1 等級水へと大幅な水質改善を成し遂げた川である。

太和江エコセンターでは太和江の歴史から太和に生息する魚、昆虫、動物などが多数展示されている。訪問団は太和江エコセンターの職員から水質改善により川に戻ってきた鮭や生息する動植物、生態系に関する説明を受けた。

7 月 14 日（土）午後② ホームビジット

ホストファミリーとの対面式は蔚山科学館で行われた。A グループ同様、日本教職員 2 人が一つの家庭にお邪魔した。言葉の壁をいかに乗り越えるかが楽しみでもあり、不安でもあったが、英語や簡単な韓国語で楽しく会話し、あっという間に数時間が過ぎた。

日本人教職員を受け入れてくださったのは、蔚山教育庁や蔚山広域市管轄の学校に勤める教職員の家庭である。学校教育のみならず、家庭でのしつけ、子どもが関心を持っていることなど、さまざまな話題で盛り上がった。それぞれの家庭がホテルまで送り届けてくださり、名残惜しく、別れがたい瞬間であった。一般の家庭を訪問する貴重な経験ができた。

A&B グループ

7 月 15 日（日）午前① 報告会（釜山広域市）

イビスアンバサダー釜山シティセンターにて報告会と閉会式が行われた。
報告会では、グループごとに発表がなされたが、まったく異なる形式で報告されたのが印象深かった。

Ａグループは山本英志先生が代表して､｢新しい学力｣というキーワードを軸に、ここから派生する言葉として「自由学期制」「主体的・対話的で深い学び｣､｢今後の社会で求められる力、人材とは」の３つを挙げて説明した。高校平準化で高校までは選抜はないが、大学入試が従来のままであるため、中学生までの創造性をのばす教育が大学受験に反映されないギャップに対する疑問点についても触れた。

日本訪問団代表としての答辞

Ｂグループは日本の公立小学校で目にする卒業式に似た形式により、全員参加型で入れ替わりに発表した。訪問先で学んだ内容に加え、国際交流の鍵はことばだけでなく、互いを理解する気持ちが大切であることをあらためて感じたこと、歓迎晩さん会で披露した「花は咲く」の歌詞のように、参加者が研修終了後にそれぞれの立場で今回の学びを生かすことが大切であることを情熱的に述べた。

7 月 15 日（日）午前② 閉会式（釜山広域市）

日本訪問団代表としての答辞

閉会式では、Ａグループの吉田信也団長が訪問受け入れに対する感謝を述べると共に、金子みすゞの「みんなちがって みんないい」という一節を引用し、これからは「みんな違って、大変だ!」という世の中であり、そこで活躍できる人間を育てなければならないということ、そして ASPnet はそれを担うことができるため、日韓で連携していきながらこれからの若者を育てていこうというお話をして締めくくった。

３．成果と今後への活用

A-01　吉田 信也

（奈良市立一条高等学校校長）

（写真右）

「韓国の教育政策の転換」

政権交代後の韓国の教育政策のキーワードは、平準化、自由学期制(自由学年制)、高校単位制である。

韓国では、生徒数の減少、高い学習達成度と低い興味・関心、詰め込み教育などの課題を抱えているとのことであるが、これは日本にも当てはまる課題である。日本では、アクティブラーニング(主体的・対話的で深い学び)を軸とした授業改善を目指しているが、韓国ではよりシステム的に取り組んでいる。それが自由学期制(自由学年制)である。中学校において、“Free from standardized tests”、“Free to do meaningful activities”をポリシーとした教育を実践し、好評であるため「学期」から「学年」へ実施期間を延ばす方向で進んでいる。自由学期制と日本の総合的な学習の時間との類似点や差異は何か、このシステム的な方向が、生徒にどのような学力をつけ、成果をあげるのかについて考えさせられるとともに、ぜひ数年後の検証・評価を知りたいと思った。

このように、韓国の新しい教育政策を通じて、日本の教育の今後について考えることもできた、非常に有意義なプログラムであったと考える。

今後の活動予定

●自由学期制や高校単位制のポリシーを、本校教育に何らかの形で取り入れることができればと考えている。韓国では、自由学期制を高等学校では行うには、大学受験等の関係で難しいとのことであった。このあたりも、日本と韓国の類似点であると感じるとともに、この壁を突破する方策を考えることが、中等教育と大学教育に携わる教員の責務であると改めて考えることになった。また、生徒同士の学習メンタリング運営や、Q ノート探究大会と Q ボードプログラム運営のポリシーも、本校教育のどこかに取り入れられればと考えている。

A-02　青山 理恵子

（愛知県立刈谷北高等学校教諭）

「人のつながり」

　このような交流事業に参加するといつも思うことだが今回もやはり交流において「人と接する」大切さを感じた。

　韓国の皆さんは、挨拶の冒頭に必ず私たちが離日する直前に起こった西日本豪雨への心配を口にし、亡くなった方の冥福を祈ってくださった。韓国の教育分野の経済的人的強さ（それがあるから公立学校でも ICT 完備などの設備の充実が図れる）や、語弊があるかもしれないが、政治の教育に対する影響力（それがあるからこそ高校は平準化し、自由学期制や高校単位制が可能になっている）など、良くも悪くも日本と違う教育事情はあるものの、生徒主体の教育やそういった教育方法と大学入試との兼ね合いなど、直接先生方と面と向かって話したことで見えてきた問題点や共通点も見つけられた。日本のイメージを示したスライドにすぐ反応し、目を輝かせて着物の着付けやお点前に参加してくれた生徒たちに接して、彼らの日本への関心の高さを感じた。結婚してソウル（都会）で働く息子さんを誇りに思いながら、ご自分は引退したら田舎に戻ろうと思うけれど妻が反対するんですと苦笑する先生に同じ悩みをもつ日本人も多いだろうと密かに思った。どれもひとりひとりを直に見ないメディアなどの報道ではわからない部分だ。

　多くの人と一人一人向き合い、つながりを持つことができた今回の交流は韓国の文化・教育を知るうえで本当に実り多いものとなった。機会を与えてくださった方々に対して感謝申し上げます。

今後の活動予定

●海外研修報告会（対象:生徒・職員・保護者）で今回の訪韓について報告（プレゼン）する。
●校誌に研修報告書を掲載する。
●韓国を取り扱ったレッスンの授業で、韓国の様子を紹介する。
●来年度開設の国際教養学科の総合学習（国際理解）や学校設定科目（国際理解）の中で扱われる ESD、SDGs 達成の授業内容について研究する。
●ESD や SDGs について、研鑽を積む。

A-03　牛丸 千枝

（高山市立松倉中学校教頭）

（写真左前）

「ESD を広めることの重要性」（抜粋）

今回の研修に際し日韓の政治的な関係を考えると融和な交流ができるのか不安をもって参加しました。ところが、行く先々で熱烈な歓迎と温かいもてなしを受け本当にうれしかったです。同時に、訪韓前に ESD について理解しているつもりでしたが、自分にそうした地球規模の課題意識がなかったと思い改めた研修でした。

印象に残ったのは、韓国の教育課題「生徒の主体的な学習姿勢の育成」とその施策「自由学期制」「高校単位制」です。詰め込み式の教育や学習意欲の低下、生徒の幸福度の低さを打破する施策ですが、日本も新学習指導要領で同様の課題に取り組もうとしています。だから、その施策による子供の姿や作品や授業風景を見て刺激を受けました。進め方に違いはあっても、他国でも同様の目標に向かって進んでいると思うと、日本もがんばらねばとの気持ちと、今取り組んでいる主体的・深い学びを進めることへの自信を持ちました。この研修に参加させて頂き、日韓の教員同士で生徒の姿や学校教育について懇談できたこと、ネット上で知り得ない肌で感じたことは、とても貴重でした。だからこそ、子供たちにこんな体験をさせていけたらと思いました。そして、新学習指導要領にもありますが、「グローバルな人材の育成」という観点において、この ESD を現場に広めること、それを生徒たちに還元させることの重要性を感じました。今、この気持ちをどう形にするか悩むところではあります。既に本年度の教育計画は進んでいるからです。でも、本年度できることを教頭の立場で実践します。そして、今すぐできなくても、その気持ちを持ち続け、年度が変わったとき、転勤で学校が変わったとき、また自身の違う立場において、確実に声をあげ実践していくことが大切だと思っています。

今後の活動予定（抜粋）

●ユネスコスクールについて、ESD の理念等のプレゼンしながら、韓国研修の中で学んできたことを、現在の日本の新学習指導要領に基づく教育とかかわらせて職員研修を行う。

●毎月発行する学校通信は、表が校長担当、裏はこまごまとしたコーナーに分けた教頭担当のスペースなので、その一部に「韓国研修記録」と称したコーナーを設けて、日本と比較しながら小話風に掲載を続ける。そして、韓国についての理解を保護者や生徒に広めていく。

●市の教頭会で、職員研修で行ったユネスコスクールについて・ESD の理念等について、時間をもらってプレゼンを行う。その中で、韓国研修の中で学んできたことを、現在の日本の新学習指導要領に基づく教育とかかわらせて広める。

●市教育委員会に、報告を兼ねてこうした文書を提出する。今後の新学習指導要領の「グローバルな人材の育成」の一つの手段として、今後、市や地区の教育活動に加えていってもらえるように努めていく。

A-04　太田 明夢

（寝屋川市立第十中学校教諭）

（写真左奥）

「韓国を訪問して最もよかったことは何ですか。」

これを尋ねられると「どうしても 1 つ選べないので 2 ついいですか。」と答えている。それは以下のことである。

1. 韓国の主体的で対話的で深い学び…第四次産業革命、国際的な学力調査の結果を受け、韓国の教育も大きな変革期を迎えている。これまでの韓国の教育といえば ICT の活用や学力の競争の過熱化といった側面を感じていたが、私が訪問した行政や学校では、自由学期制・幸せな学校・ESD・世界市民教育といった、生徒の主体性や思考力を養うカリキュラムやこれからの社会に必要な資質能力の育成に取り組んでいた。日本の教育改革や新学習指導要領と大きな舵取りは相違ないことを感じた。つまり、新しい社会を生き抜く力は各国独自のものでなく国際的な視野で養っていくことであり、これらを目の当たりにできたことは、自身の教育の在り方に大きく影響をもたらすに違いない。
2. 参加者との出会い…多種多様な教職員や教育行政機関の方々と一緒に過ごすことができたのは、私の人生の宝である。韓国、日本それぞれの教育について、各自治体や学校の取り組みを話し合い、時に助言を頂き、時に日ごろの悩みを語り合うことができた。願わくは、今後も交流をもちながら切磋琢磨していきたい。

今後の活動予定

●韓国の教育施策や ESD について教職員への発表。
●韓国の生徒の様子を全校集会で生徒に発表。
●担当学年（中学 1 年生）には、韓国の街の様子や日本文化への関心を伝える興味関心をひきだす。
●大清中学校での成果物を参考に、生徒の資質能力の育成・カリキュラムマネジメントにむけて授業改善をおこなう。
●プログラム参加者と持続的な関係を築き、今後の相互の教育活動にいかす。
●寝屋川市主催の教育論文に、貴プログラムでの実践と成果をまとめる。

A-05　太田 竜一

（市川中学校・高等学校教諭）

「共通の課題の解決に向けて」

韓国の授業を見学し参加したことは得がたい経験であり、日本の教育を客観的に眺める好機となった。主体的・対話的な学びをめざす改革が日韓双方で進展していること、自由学期制、高校平準化、男女別学などの独自の取り組み、大学受験は依然としてハードであることなどを知り、日本の改革の成否を占う上でも韓国の教育事情について研究する必要があると感じた。同様に韓国の教員・生徒も、日本の教育に対して高い関心を持っていることを知った。複雑な問題も抱えている日韓であるが、似ている点の方が多く、教育現場も共通の課題を抱えていることを考えると、友好関係を築き協力していくことが双方の利益になると実感した。

韓国の方々の歓迎と交流は、訪問の中でもっとも楽しい思い出である。今は韓国に対する関心が格段に高まり、国際交流に積極的に関わっていきたいと考えている。様々な面で、自分の教員人生における貴重な財産となった研修であった。

今後の活動予定

●高校の世界史を担当しており、文化探訪などで新たに得た知識や、撮った写真などを授業に活用していきたいと考えている。

●今回の訪問に関して報告書を作成することになっており、全職員で共有する。教員向けに発表する機会があれば行いたい。

●他校・他県との教員間や、業者主催の研究会に参加する機会が多い。教育改革や入試改革についての話題が多いため、韓国の教育事情について紹介していきたいと考えている。

A-06　菊地 英明

（東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭）

（写真左手前）

「行って聞いて見て知る韓国」

今まで韓国には十数回訪問したことがあったが、教育行政機関や教育施設を訪問したことはなかった。しかし、韓国の教員とは話をした機会があり、日本よりも進んでいる面が多いことなど韓国の教育にとても興味をもっていたため、このプログラムに応募し参加した。

今回の訪問で感じたことは当たり前のことのようであるが「行ってみて聞いたり見たりしなければわからないことが多い」ということである。平準化や自由学期制などの教育改革に取り組み成果をあげようとしている行政、その改革に大学入試との板挟みにあいながらも日々生徒とともに過ごす教員、授業ではキラキラと目を輝かせながら夜遅くまで勉強に励む生徒、学歴社会のなか教育改革や子どもの成績に頭を痛める家族…。また、文化探訪では昌原と日本の関係の深さを知ることができた。

今回の学校見学で見た生徒たちの輝く目を心に刻んで今後の教育活動に取り組んでいきたい。

今後の活動予定

●生徒の中には「国際化＝アメリカナイズ」と考えている（または無意識ではあるが行動に現れている）者が多いように感じている。また、教員の中にも韓国やアジア諸国への渡航歴がない者も多い。世界の中には多様な文化があること、中でも隣国である韓国やその他アジア諸国と日本には文化的に共通（またはとても近い）なものがあること、そしてそのアジア文化の中には教育文化も含めて世界に誇れるものが多いことを伝えていきたい。

●私が所属している日本家庭科教育学会では、日本と韓国の教育比較や教科書比較を研究対象としている教員がいる。時折「○○（国名）の学校で知っているところがあれば紹介してほしい」といった相談を受けることがある。そういった相談にも今まで以上に積極的に関わりをもっていきたい。

A-07　櫛田 真一郎

（愛知県立千種高等学校教諭）

（写真左）

「日本語を流暢に話す多くの生徒たちとの出会い」

今回の訪問で一番驚いたのは、日本に興味を持ち、独学で日本語を勉強している生徒の多さである。海成国際コンベンション高等学校での学校紹介やトッポギ作り、そしてホームビジットで、日本語を流暢に話す生徒と出会い、とても助けられたと同時に、その日本語の流暢さに衝撃を受けた。私の勤める千種高校の国際教養科では、２年次に第２外国語としてフランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、ハングル、イタリア語から選択して１つを週２時間学習するが、授業だけでこのレベルまで到達することは不可能である。そのため、どれだけ独学で学習しているのか、そのモチベーションはどこから湧いてくるのか知りたいと思った。

ホームビジット先で出会った中学生は、日本のアニメが好きで、姉が日本で勉強していたこともあり、日本語に触れる機会が多かったようである。それでも、中学生が日本語だけで日本人と普通に話せることは驚きであり、その行動力を支えているのは、韓国における教育実践の成果ではないかと感じた。

今後の活動予定

●現職教育の一環として、今回得られた学びや経験を職員間で共有する機会を持つ予定である。また、生徒へも授業の中で、韓国の学生の学校生活の様子などを話す予定である。

●私の家族にも今回得られた経験を話し、特にホームビジットでの体験を語ることで、私の家でもホームビジットの受け入れ先になれないか検討したい。

A-08　佐藤 亜矢香

（埼玉県立富士見高等学教諭）

「『持続可能な交流』に向けて」

訪韓を終えて「持続可能な交流」という言葉が心に残った。慶尚南道教育庁を訪問させていただいた際に、国際交流活動の一環として子どもたちがほほ笑む写真とともに絵葉書交換を通じた持続的な国際交流を例として紹介していただいた言葉である。先進的な ICT 教育が行われている韓国でも、子どもたちが自分自身の書いた文字で顔の見える交流を行っていることを微笑ましく思うと同時に、私自身も、今回の訪韓で出会った方々と一度限りの交流で終わらせることなくこれからも様々な形でつながり続けていきたいという気持ちを強くさせられた。

訪韓中に出来るだけ多く韓国の先生方からお話を伺い、交流して学んだことを日本に持ち帰りたいと考えていたが、日本の教育についても質問される機会が多くあり、日本の教育の良さや課題について捉え直す良い機会となった。また、ホームビジット先でお世話になった韓国の先生から日本の教育書を参考にして授業をしているというお話を伺い、他国の教育を参考にして試行錯誤しながら自国の子どもたちの成長を願う想いは世界共通なのだと改めて感じた。

今後の活動予定

●訪韓前に授業を担当している生徒たちから韓国の学校生活や文化などについて知りたいことを紙に書いてもらう活動を行った。そこであげられた質問のほとんどを今回の訪韓で詳しく知ることが出来たので、2 学期の授業で生徒たちに紹介したい。また、海成国際コンベンション高等学校で文化授業をやらせていただき、日本のことについて知りたいことを紙に書いてもらったので、日本帰国後、本校の生徒たちにそれらの質問を紹介し答えたいと思う。現在、高校 1 年生の「現代社会」の授業 SDGs の 17 の目標ごとにテーマ学習行っている。2 学期の授業では、4 番目の目標の「質の高い教育をみんなに」と関連付けて、韓国の教育事情や学校の様子についても生徒たちに紹介したいと考えている。

●現在参加している月に 1 度の勉強会で、教員ばかりでなく NGO・NPO に所属している方々や民間企業にお勤めの方々に韓国の教育事情や今回視察した内容について情報共有する場を設けたいと考えている。

A-09　下井 慈

（長野県飯田市立旭ヶ丘中学校教諭）

「生徒の『学びたい』意欲をかき立てる、新しい授業スタイルの創造」

今回高校２校、中学校１校の学校訪問をさせていただいたことが、本プログラムにおいて最も有意義な内容であった。まず、授業参観の中で、韓国の小中学生の生の姿を見ることができた。どの学校でも「アンニョンハシムニカ」という丁寧な言葉遣いで、明るく挨拶をしてくれる生徒ばかりだった。日本では「仲良くなること」と「なれ合い」の壁がなくなってしまい、ともすると先生に対しても、相応しくない言葉遣いをしている生徒がいたり、それに対して指導をしない先生がいたりするが、韓国では先生に対しては廊下でも一瞬止まって挨拶をするような日本の学校が失ってしまった礼節を重んじる校風が今も息づいていた。しかし、一方では先生との関係性の良さがうかがえ、どの授業をみても先生と和気あいあいと心を開いて学習をしている姿があった。行われている授業は、知識詰込み型の一斉授業ではなく、グループになってわからないことは教え合い、自分の考えを伝え合う、「学び合い」が行われていた。また先生方も最新の教育設備や機器を駆使し、生徒の学ぶ意欲をかき立てるような工夫が随所に見られた。学習のまとめ方も教科によって様々で、単純に記述するだけでなく、図や表を使いながら自分の考えを表現することが大事されていた。日本も韓国も第４次産業革命の時代に即した新しい教育を創造しようとしていることがわかり、これからも互いに交流し学び合えるといいと思った。

今後の活動予定

●生徒に、学校訪問の様子をビデオで紹介する。そして韓国の学校と日本の学校の違いや共通点について説明したり、韓国の学校教育で日本でも生かせそうかことを生徒に伝え、自分でも実践する。また、日本語に興味を持って学習している生徒も多いということを伝え、平仮名で中学生に手紙をかいてもらい、韓国の訪問した学校に送付させていただく。また、文化授業では伝えきれなかった、本校の学校教育目標や、特色ある学校づくり、生徒会活動の様子なども CD などにまとめて送付する。

●職員研修において韓国の最新の教育事情を説明する。特に授業の工夫されているようすや、最先端の設備が授業で活用されている様子、またあまり知られていない高校の平準化などについても説明し、異文化理解につなげたい。また四種類ある高校のことや自由学期制、部活動など日本と非常に異なる取り組みも伝えたい。

●飯田市教育委員会において、韓国で訪問した教育庁や学校について説明したい。特に韓国のユネスコスクールの学習活動や世界市民として教育をしている様子、世界のリーダー、世界に貢献する人を育成するために尽力されていることを伝え、飯田市の教育ビジョンを見直す一つの視点として参考にしてもらえる機会を作る。

A-10　高倉 洋美

（大牟田市教育委員会事務局指導主事）

（写真右）

「人と関わり人とつながる」

ユネスコスクール、ESD、SDGs・・・これらに関わって、常に「つながり」を実感する。特に今回の韓国訪問では、心から人と関わり、人とつながることの素晴らしさを実感することができた。

まず国内の先生方、ACCU、文部科学省の方々と関わり、つながりを深めることができた。年齢が親子ほど違う若い先生方もみんなで情報交換し、同じ課題で考えを出し合い行動を共にする。そのつながりの中で芽生える仲間意識、心のつながりは体験でしか得られない貴重なものだ。

そして、韓国の方々ともつながりを広げ、深めることができた。何よりも一週間お世話いただいた韓国ユネスコ国内委員会の方々、通訳の方の温かい心遣いに緊張も解け、今まで“近いが遠い国”だった韓国が、本当に“一番近い国”となった。様々な人と関わり、つながることで心がつながり、さらに広まり深まっていく。今回訪問した教育庁の方、ホームビジットでお世話になった方々と最終報告会で再会しその後のフリータイムも行動を共にすることができ、楽しいひとときを過ごすことができた。帰国後もメールでの交流が続いている。今後もつながりを大切にし、人とつながることの素晴らしさを周囲に伝えていきたい。

今後の活動予定

●現在、教育委員会指導主事という立場であるので、現場の先生方にももっと視野を広げて実践に工夫していってほしいと思うので、今回のプログラムの様子を紹介したいと思う。

まずこのようなプログラムに積極的に参加し、自身の視野を広げ、人とのつながりを広げること、自身のスキルアップを目指すことを勧めたい。国内の先生方の交流だけでも、とても有意義であることや、海外に目を向ければもっといろんなものが見えてくるし広がっていく。この素晴らしさを伝えたい。先生方の研修会や私が担当で ESD 関連のお便りを発行しているので、その中でも伝えていきたいと考える。

●今後の ESD/SDGs の取り組みに積極的に学んだことを取り入れ、新しいプログラムを立ち上げることができればと考えている。大牟田市は市をあげて ESD を推進しているが、まだまだやれることはたくさんあると考えるし、もっとわかりやすい誰もが取り組みやすいプログラムを考えていきたい。

その中に、韓国との交流を是非行っていきたいと考える。

A-11　西村 隼一

（兵庫県立川西明峰高等学校教諭）

「同じ方向を向いて」

韓国の教育現場を訪問する中でいくつかの点で韓国も日本も同じ方向を向いているのだと感じた。韓国でも教師主体の詰込み型の教育から生徒主体の共同学習や体験型学習に変わっていっている。韓国の教職員の方々との懇談会では「第４次産業革命」という言葉が度々登場した。知識だけでなく今後大きく変革していく社会に対応できる力をもった生徒を育てなければならないのはどの国も同じだ。韓国の「自由学期制」や「過程中心の評価」は日本の「総合的な学習」や「ポートフォリオ評価」と同じ目的を持っていると感じた。

文化授業で日本の高校生の様子を紹介したのだが、韓国の生徒たちは興味津津で、質疑応答では質問がやむことがなかった。日本に帰ってきてクラスの生徒に韓国での話をしたときも同様に興味をもって聞いていた。彼らはお互いの文化を理解したいという気持ちを持っている。同じ方向を向いて、教育を受けた彼らが自国のためだけではなく世界のためにお互い理解しあい協力しあえる日が訪れる一助に我々がなれればよいと思う。

今後の活動予定

●職員研修における韓国で得られた情報の共有
●生徒向けに韓国の文化の紹介・文化交流の推奨
●スカイプなどによる交流や交換留学など

A-12　西嶋 桃子

（麹町学園女子中学校高等学校教諭）

（写真右）

「未来をみすえて」

「10 年後には今ある職業の半数以上が AI に取って代わられ消滅する」というアメリカの大学の研究報告によって、日本の教育も学習内容や学習方法の大きな見直しが行われていますが、韓国でも「第四次産業革命」に対する先生方の危機感を感じることができました。英語をはじめとする外国語の取得ももちろんですが、各教科において生徒の思考力、判断力、表現力を育てる学習活動や、地球的課題に対する興味関心を引き出す学校全体、地域全体の取り組みに感動しました。大清中学校では、実際にテストの作問の仕方や、生徒の読書に対する働きかけなど具体的な教育活動について問題を共有し、議論できたことが印象に残っています。「第四次産業革命」に対する真剣な取り組みが伝わってきました。大清中学校の校内には生徒の学習成果物があちこちに展示されていましたが、日本の学校と大きくちがうのは、芸術作品に偏りがちな日本とは異なり、数学や理科、社会科分野の作品もたくさん展示されていた点です。教科に関わらず生徒に発表する場を与え、お互いに学びあえる環境をつくることは、ぜひ私自身の勤務先でも取り入れたいと考えています。大変貴重な機会を与えていただき感謝しております。

今後の活動予定

●韓国の学校との学校交流を具体的に進めていきたいと考えています。今回お会いすることができたいくつかの学校に打診してみるつもりですが、ACCU 様にも助けていただけますと幸いです。本校の生徒は韓国に関心がある生徒がたくさんおりますし、これまで英語圏に偏っていた学校としてのグローバルプログラムもアジアに展開していきたいと考えています。まずは、今回の研修成果を学内広報し、生徒や保護者の韓国に対する、また国際交流に対する関心をさらに高めていきたいと思います。

●本校が立地する麹町や千代田区の地域への発信を検討しています。まだ具体的な方策は決まっていませんが、何か行いたいという希望をもっています。

A-13　畠山 尚之

（大阪府立北淀高等学校教諭）

（写真左）

「基本に立ち戻る」

ユネスコの理念は、これから地球上の人間にとって普遍的なものになりうるだろうし、ESD も世界の教育の潮流に乗るであろうと私は考えている。ただし、これは私だけに限ったことでは無いだろうが、この“新たなコモンセンス”についてどのように同僚の教職員に理解を得て教育活動を展開していくのかが課題だと考えている人は少なくないと感じる。子ども達が幸せに育つ学びに可能性を感じていたとしても、一人で進めてゆくにはあまりにもしんどい。私は ASPnet 校としての学びが進んでいる韓国では何か特別なカラクリがあると考えていた。

上記の課題を克服すべく様々な機関で質問をしたが、大凡が『授業を工夫することから始めなさい。』であり、基本に立ち戻らされるものであった。授業を変えると生徒が変わり、生徒が変わると教職員が変わり、教職員が変わると学校が変わるということである。たとえ文化や教育制度が違っても、根本は同じであると感じた瞬間ホッとしたと当時に、同僚と話をして生徒が興味深いと感じる授業をしていこうという熱い気持ちにもなった。韓国では複数の学校に訪問し授業を拝見したが、どの学校のどの授業でも生徒が学ぶ意欲を見せ、主体的に発言する姿を見た。これは教員が普段の授業から生徒の興味関心を引き出す取り組みを行っているためだろう。

私もユネスコの理念のプレゼンターとして人を育てるという観点のもと、日々生徒への問いを磨いていく事にこれからも力を注いでいきたいと感じた一週間であった。

今後の活動予定

●授業

・韓国で学んだ事を生徒に共有する。

・ユネスコの理念を地歴・公民科の授業に組み込んでゆく。

●ユネスコ部の活性化

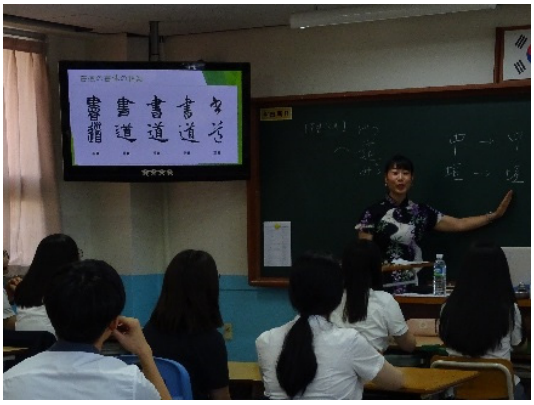
・他校のユネスコ部との交流。

・生物部と共同で校内菜園。

●大阪 ASPnet の活動において、本校生徒だけでなく参加校全ての生徒が成長し学び合える、ESD を推進してゆきたい。また、今回出会った全国の教職員との交流を継続させたい。

A-14　中垣 尚子

（三重大学教育学部附属中学校教諭）



「直接交流の素晴らしさ」

学校を訪問し、授業を参観できたこと、更に、授業をする機会があったことは貴重な経験となった。その場で生徒とやりとりをしたり、そのやりとりを参観したりできることで授業の様子がとても伝わってきた。4 人グループを使っていたり、課題解決型の課題やパフォーマンス発表をしたりしている点は日本と似ていたが生徒の様子は違っていた。韓国の生徒はとても積極的で反応や発言が多かった。日本との違いは何かを考えるいい機会になった。

韓国の学校事情についてもたくさん学ぶことができた。日本と似ていると思い込んでいたが、知っているつもりで知らなかった「平準化」、「自由学期制」といった高校受験がないこと、新年度が３月に始まること、男女別のクラスや学校が多いことは驚きだった。部活動や塾といった放課後の過ごし方など、韓国の教育の実態を知るいい機会になった。

一番嬉しかったのは韓国の先生方や生徒、行政の方、スタッフの方や通訳の方など多くの韓国の方と知り合い、直接交流ができたことである。この縁を大事に繋げていきたい。

今後の活動予定

●帰国後に学年集会で「韓国の学校について」紹介した。派遣前に日本の生徒から集めていた韓国の生徒への質問の答えも紹介した。また、韓国の生徒から日本の生徒への質問も紹介し、プリントにして、その返答を書いてもらった。韓国の学校の様子を聞いた感想を書いてもらった。日本の生徒の質問の返答や感想をもとに、メールのやり取りで情報交換をするなどして、韓国の生徒と交流を続けていけたらと思う。そして、２学期以降も紹介しきれなかった分を授業や学級活動の中で生徒に紹介するつもりである。職場の教員に対しては、夏休み中の研修会の中で報告会を行う。また夏休み中の研修で一緒になった職場の違う教職員の方にも学んだことを報告させてもらう機会を作っていきたい。

●ユネスコ協会やその他の国際協力機関とも協力していきたい。このプログラムに参加したことは伝えたので、報告や経験を共有する機会があれば生かしていきたい。

A-15　彦坂 永利子

（愛知県教育委員会課長補佐）

（写真右）

「主体的に学ぶ生徒の育成について」

高等学校で 2022 年から実施される新学習指導要領においては、主体的・対話的で深い学びに代表されるように、何を学ぶかよりも、「どのように学ぶか」が、重要となっている。この学習指導要領の改定は AI や IoT の進展に伴う急速な社会と産業構造の変化に直面しているからであり、子供たちが、これからの未来を豊かに生き抜いていくためには、「答えのない問いに対して問い続ける力」であったり、「他者と協働する力」や「自らの考えを表現する力」を身に付けることが重要となる。これからの教師は、適切な問いを与えて、生徒同士のグループワークやディスカッションを取り入れ、生徒の学びに向かう主体的な動きを創り出すファシリテーション力が、より必要とされるだろう。今回のプログラムにおいて見聞した韓国でのコミュニカティブな授業は、主体的に学ぶ生徒の育成に非常に有効であると感じた。訪問した各校での、学びに向かう生徒の真剣なまなざしが、それを如実に表していた。

今後の活動予定（抜粋）

●現在は教育委員会に勤務しており、直接生徒に話ができる立場にはないが、ここでの勤務も３年目を迎えるため、近い将来、高等学校の現場に戻ることを想定している。また、今回のプログラムで、他国を理解するためには「その国の人に直接会って話をすること」が最も重要だと感じた。日本と韓国の間には政治的な問題もあるため、本当は韓国の人々は日本人に対して良い感情を持っていないのではないか？と、報道等の状況から感じていたが、今回のプログラムを通して出会った方々は、とても友好的で、親切であり、報道は一面のみを切り取って強調して伝えるため、本当のところは見えにくくなっているのではないかと感じた。互いの国の本当の姿を知るためにも、人と人とが直接対話をする重要性を改めて感じた。この経験から、今後赴任した高等学校において、できれば韓国の高校と姉妹校交流ができるように尽力したい。訪問した慶尚南道は韓国国内でも、より日本に近い位置にあり、学校間交流も行いやすいのではないかと考えている。今回できたご縁を今後につなげていきたいと考えている。

●上述のとおり現在は学校に勤務していないので、直接的にこの経験を生徒に伝えることができないが、業務としてユネスコスクールの担当をしているので、ユネスコスクール支援会議において研修内容について触れたり、学校等に研修内容を紹介する機会があれば、積極的に紹介できるよう努めたい。また、愛知県公立高等学校 PTA 連合会に対する指導助言をする立場にもあるので、常任理事会や理事会等の場面を捉えて、研修により得た知見を保護者等に還元できるように努めたい。

A-16　堀田 正明

（池田町立池田中学校主幹教諭）

（写真右手前）

「高等学校での特別支援学級」

昌原竜湖高等学校を訪問し、特別支援学級を参観した。日本では、児童生徒の人数によって、公立小中学校に特別支援学級の設置はあるが、県立高等学校にはない。これは、日本の高等学校入試制度が関係している。日本では、中学校（義務教育年間）卒業と同時に進学を希望すれば、各校区特別支援学校の高等部への進学を選択することが多い。韓国では、教育改革での平準化によって、高等学校で支援学級が設置されており、メリットを高等学校の教師に質問すると、学年や学級の枠組みを外して交流できることであった。「〇〇してあげる。」という立場でなく、お互いが同じ教育環境の中で「学び合う」「助け合う」という社会性・福祉性がはぐくまれることが土台にある。教室内で、笑顔で作業学習（スプーン・フォーク磨き）に取り組んでいる生徒の姿が印象的であった。また、日本の特別支援学校とは違い、高等学校卒業の認定となることも大きな違いであると感じた。もう一つの、職員グループから特別支援学校を訪問しての報告があったが、卒業後の就職活動を見通しての学習や作業実習、また、卒業後のための資格取得などについても児童生徒の自立を最優先に考えた教育がなされていると強く感じた。

今後の活動予定

●現在私は、主幹教諭という立場で、授業はありませんが、韓国の教育行政、教育現場、教育の未来について、各学年での集会や職員会議で話題にしていこうと考えています。主幹教諭として、職員会で提案の時間を割いて頂けるので、平準化についてや自由学期制について、韓国の教育改革についてお知らせできればと考えています。

A-17　前田 愛咲美

（静岡県立韮山高等学校教諭）

（写真右手前）

「心の壁を作らない。」

今回の訪問では、3 つの学校を訪問したが、どの学校でも生徒たちが私たち訪問団に向かって「こんにちは」「おはようございます」と日本語であいさつをしてくれ、窓から手を振って迎えてくれた学校もあった。生徒たちと交流する場面では、独学で勉強した日本語、学校の授業で習いたての日本語、日本語ができなければ英語で、と私たちとどうにかコミュニケーションをとろうと積極的に話しかけてくれる姿に感動した。そこには、誰とでも、どこの国の人にも、どんな立場の人にも心に壁を作らず、コミュニケーションをとってみようという気持ちが見えた。これは、他者を認める、また、自分と違うものを否定せず受け入れるという ESD において重要な考え方が体現されていると感じた。さらに、生徒のみならず訪問先の先生方も同様であり、生徒にさせたいことはまずは教員がやってみせることだという信念が伝わってきた。このプログラムに参加し、多くの人と交流し、自分から進んで様々なことを知り、認めることの大切さを改めて教えられた。

今後の活動予定

●本校教職員に向け、報告を行う。（会議の一部で発表、または報告書としてまとめて配布）
●ICT の設備が今年中に整う予定であるので、韓国の学校現場での ICT 使用を参考にして授業に取り入れていく。
●授業やホームルーム等で折に触れて今回の韓国訪問のこと（韓国の学校、生徒の様子など）を生徒に話す。
●校外での活用については検討中。

A-18　松岡 由美子

（埼玉県立浦和西高等学校教諭）

「３つの成果」

プログラムを通じて得たことをおおよそ３つに分けて成果とすることができる。

①もてなし方

韓国側のおもてなしが、形式的ではなく現実的でありがたいと感じられるものばかりであったことを特筆したい。水のペットボトルを一人１本準備する、訪問団の名札プレートを準備する、校内案内時のワイヤレスマイクとレシーバ、生徒による学校説明や校内案内など、一つ一つが学校の良さを示しながら訪問団の快適さや充実さを充分に考慮されていたものであった。教師同士の意見交換会（懇親会）を日本では、夜に設定することが多いが、改善すべきだと強く感じた。

②ACCU のプログラム

限られた時間と予算の中で、いかに充実させた内容にするかを良く練られており、無駄がなく参加者の要望を良くくみ取ったものとなっていた。参加者に現地での係割り振りをする点や、滞在中に報告会を設けるのもよいと思う。そのことによって責任感や能動性が生まれる。また、現地でプログラムを自身で振り返ることができるので、持ち帰ることのできる成果が大きい。本校で生徒をオーストラリアに派遣しているが、その際の改善点がこの充実した内容からたくさん見えてきた。

③文化探訪

韓国の歴史を知ることができた。唯一残念なことは、伝統文化や工芸である青磁や白磁を見ることができなかった点。同じような資料館を２か所訪れたが、国立博物館の訪問に切り替えてはどうかと思った（昌成にて）。

今後の活動予定

●まずは、授業方法も含め授業にて活用したい。また、国際交流委員会にて、訪問団の受け入れの際と、本校生徒を引率し海外を訪問する際の改善点を提案していきたい。さらに、留学生の受け入れを行っているが、留学生のフォロー・ケアが充実しているとは言い難い現状を改善していきたい。将来的には、所属校のユネスコスクール加盟を働き掛けたいと考えるようになった。

さらに、参加された日本人の先生方と交流を続けながら、情報交換や訪問をすることにより、本校の教育に活用したい。

●韓国語を勉強し続けたい。個人的に韓国訪問をしたい。

A-19　山城 史人

（静岡市立玉川中学校教諭）

（写真左手前）

「出会いを大切に、今後に繋げていく」

本プログラムに参加し、自身の今後の教育活動に大きく影響する貴重な経験と出会いをさせていただいたことに深く感謝している。訪韓以前は「加熱する大学受験と学歴重視」という印象が強かったが、各学校、教育庁訪問を通して、「中学の自由学期制」、「高校の単位制」など急速に変化する社会に対応できる力を養成しようとしていることを知り、我が国が取り組もうとしていることと方向性が似ていることが分かった。韓国語での会話や話題など不安が大きかったホームビジットが、結果的には最も有意義な時間となった。訪問したご家庭で準備していただいた家庭料理を囲みながら、それぞれの文化について紹介し合い、日常生活の一端に触れることができた。また、学校訪問の場面の質疑応答では聞くことのできないような本音の部分での情報交換や意見交換ができた。今回のプログラムを通じて得られた多くの出会いを大切にし、今後も繋げていくことや広げていくことが私に課せられた使命だと感じている。

今後の活動予定

●教職員を対象とした報告会

８月に行われる本校職員及び隣接学区の小学校職員合同での校内研修において、今回のプログラム内容や体験から学び、感じ取ったことを伝える時間を設定する。そのことで教職員への情報の共有、教育観への影響を与えていきたい。

●生徒を対象とした報告会

学校集会にて全校生徒を対象に、今回のプログラム内容や体験から学び、感じ取ったことを伝える時間を設定する。そのことで生徒が韓国を含め他国の文化に興味や関心をもてるようにしていきたい。

●今回の訪問団として知り合えた方々との情報交換や交流

訪問団の方々が自校でどのような活動をしているのか、お互いに情報交換を行い、自分の活動の参考にしたい。

A-20　山本 英志

（東大阪市立縄手中学校教諭）

「持続可能な交流」

今回のプログラムで最も印象深かった内容は、ホームビジットである。高校生の男の子、中学生の女の子、ご両親の４人家族との交流であったが、本プログラム中に学んできた韓国の教育制度について、生の声を聞くことができたことは、大変貴重な機会となった。

互いに慣れない日本語と韓国語、翻訳アプリ、そして英語を用いて、互いの気持ちを伝え合った。韓国の中高生の英語力の高さ、そして積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿が感じられた。そんな私たちの姿を見ていた父親が、「異なる文化を知ることはとても大切だ」と話し、英語やアプリを用いて私とコミュニケーションを取ろうとしてくれ、大変うれしかった。高校生活、高校平準化等について直接質問をすることができたが、子どもたちとご両親の認識が少し異なる内容もあった。教育制度改革が家庭には伝わり切っていないことを感じた。

全国各地で活躍する先生方と交流できたことも、大変貴重であった。帰国後も、ホームビジットで出会った高校生、訪問した高等学校の教員とやり取りを続けている。日韓両国、そして全国の教職員同士で草の根の交流を継続・拡大していくことが、我々参加者の使命である。

今後の活動予定

●生徒、教職員に訪韓の様子、成果を伝える
●国際理解教育の中で、特に韓国について取り扱い、日本との共通点や差異について学習する機会をつくる
●勤務校区の取組みが“持続可能であるかどうか”を常に意識して、小中一貫教育を実践する
●勤務校がユネスコスクールに登録するメリットを伝え、申請に向けての準備をすすめる
●伊井先生の所属する大阪 ASPnet に参加し、ユネスコ理念の具現化の方法について知る
●東大阪市内の学校の先生方に、本プログラムやユネスコ理念、ESD、GCED について伝える
●東大阪市内の学校のユネスコスクールへの登録をすすめる

A-22　吉岡 静

（筑波大学附属坂戸高等学校）

（写真右手前）

「韓国から学んだこと　日韓の共通性」

今回初めて韓国に行き専門的な学習をする高校、普通高校、中学校の３校を見学してみて、韓国と日本の教育において、基本的な考え方は全く同じなのだと思った。なぜならば、日本でも話題にされている第四次産業革命に伴う社会の変化に対応できる、思考力・想像力・判断力の備わった他者と協力し合える生徒を育みたいという考えが各学校から感じられたからだ。小学校でのグループワークなどによる他者理解・自己理解教育について話を聞き、中学校での思考力、想像力を鍛える授業や展示物を見て、自分の授業に取り入れたいと思うことがたくさんあった。一方で、高校での、中学までの学びを継続したい気持ちと受験に備えなくてはならない現実のギャップに関する話も聞き、まさに日本と変わらないと思った。各学校での教職員交流会やホームビジットで深い交流ができたため、今後とも同じ課題に対して共に交流しながら解決の道を探っていけるつながりを得ることができた機会となった。

今後の活動予定（抜粋）

●本校では、留学生と交流する機会が多いため、国際交流に意欲的な生徒が入学してくる。今まで交流が盛んであった国はインドネシアやタイ、フィリピンなど姉妹校のある ASEAN 諸国が中心であり、中国や韓国の学生はたまに外部の留学斡旋団体の紹介でやってくる１名、といった様子である。しかし、今回のプログラムに参加するために生徒への意識調査を行ったところ、韓国への強い興味を持つ生徒が多いことが分かった。そこで、今回見てきたことを共有し、生徒のニーズに応えていきたい。また、韓国の中学校が行っていた授業を紹介しながら生徒にも同じように取り組んでもらい、どのように感じるかなどを分析していきたい。既に、高校１年生のクラスで韓国を紹介する授業を行ったが、やはり興味津々で話を聞いてくれた。これをきっかけにどんどん韓国で学んだ面白そうなプログラムを授業で取り入れていきたい。また、韓国の高校生から教えてもらった食文化を他教科と連携しながら本校でも紹介するために、韓国の教育事情や実際に見て感じたことなどを共有していきたい。

●韓国では日本語の需要があることが分かったため、日本語教育に関する場面で日本語を勉強していた韓国の高校生のエピソードを紹介するなどしていきたい。本校には外国をルーツに持つ子どもがおり、また日本語教育に興味を持っている生徒も多い。しかし、海外の日本語教育事情については今まで触れたことがなかったため、今回見てきた高校生の話をすることで彼らの関心に答えていきたい。さらに、今後の可能性として、例えば海成国際コンベンション高等学校の日本語英才クラスの生徒が日本と交流したがっていた様子など、日本に興味を持っている韓国の高校性が一定数いることも分かったため、本校で日本語教育に興味を持ち、ボランティアや卒業研究に取り組んでいる生徒と韓国で日本に興味がある高校生との交流が行えないか考えていきたい。

A-23　吉川 大地

（岡山龍谷高校常勤講師）

（写真右手前）

「生徒と自分のために今後の研鑽を」

自身が今回のプログラムの中で自身が一番やり残したと思うことは、文化授業ができなかったことである。自身が教員としての歴も浅く、また日本の文化に対しての理解が低く文化授業を作ることが出来なかったと感じた。今後の時代を生きていく子供たちを養成していく立場として教員としての改善すべき点を見つけることができた。世界市民であるために自国の文化を理解していること、またそれを人に紹介できることは必要な資質であると考える。生徒に活動を行わせるためには自身も理解をする必要があり生徒共に理解を深めていく必要があると本プログラムを通して思うようになった。

また本プログラムを通して強く思ったことは言語教育のさらなる強化である。英語の教員にのみ頼るのではなく教員全体で言語教育を強めていく必要がある。世界の各国と交流をするにあたりマルチな言語を使えることは必要であり学校、国を挙げて取り組んでいく必要がありまた自身も言語活動を研鑽していく必要があると強く感じた。

今後の活動予定

●韓国の生徒たちの学習に向かう姿勢を生徒たちに伝えて、学習意欲の改善を務めていきたい。また韓国での学校見学の際に生徒を寝させない、また集中を続けさせるための対策として、立ちながら授業を受けることができる椅子を見て本校でも早急に導入をしたいと思った。また、本校もユネスコスクールとして外国の教育機関を受け入れることができるように学校の制度の構築と生徒の指導をしていきたいと思う。具体的な案としては本校でもユネスコスクールとして生徒たちに世界市民を意識させるような部活動もしくは活動を推進していくこと、英語教員にのみ頼るのではなく全教員で語学学習の推進を進めていき生徒とともに教員自身も語学能力の向上に努めていくことを取り組んでいきたいと思う。

●自身の日本文化に対する理解が少ないことに気づくことができたので、日本文化や学校がある地域の歴史や特色を生徒共に理解を含めていく必要があると感じた。他国の理解をするためには自国の理解が必要不可欠であり学校としてまたクラス担任としてクラスの生徒とともに学習を進めていきたいと思う。また上にも記述して通り言語能力の向上に努めたいと思う。特に英語の学習に関して私は数学教員であり英語に関しては日常会話がなんとかできる程度のレベルであるが、日本以外の土地に行った際にやはり力不足を感じた。生徒に学習に向かわせるためには教員も学ぶ姿勢を見せてともに学んでいきたいと思った。最後に今回のプログラムに参加して地元の地域のことについて知るのはもちろんのこと韓国やまたその他の世界の地域に関心を持続させていき、積極的に情報を仕入れていきたいと思う。

B-01　伊井 直比呂

（公立大学法人大阪府立大学准教授）

（写真右）

「韓国社会の教育に対する想像力と創造力」

全体を通してよくわかったことは、初日の韓国教育部による平準化教育の進展などによる、一人ひとりの可能性を引き出そうとする教育。また、SDGs などの最重要部分である「誰一人見捨てない」という理念を具現化した蔚山教育庁での「誰一人諦めない」という教育方針。さらに貞媛中学校や幸福学校・彦陽小学校などに一貫していた学習者にとっての教育環境のきめ細やかな整備などが印象深い。これらは、つまり、競争して短期的な個人の入試学力を伸ばそうとすることではなく、（基礎技能の学習を前提としつつも）人としての想像力と創造力を培う教育を行っていることがよくわかるものであった。現在厳しい競争下にあるのは科学技術学校と外国語学校であるという。これらを目指す以外は平準化教育の地域の学校に通う。これまでの基準での競争的能力とは異なる、多様な能力を発見する力やそれを育てる力が教師に求められていることを考えさせられた。

今後の活動予定

●大学においては、講義の中で SDGs 等を扱う。その内容は社会科教育法、教育の法と制度、3 回生ゼミ、4 回生ゼミ、現代教育論（大学院科目）に反映される。その内容の重要な部分として、韓国各学校での取り組みを紹介する。とりわけ貞媛女子中学での ESD ダンスのストーリーは人間の内面に潜む葛藤を描いており、持続可能性のための自己と、現在の享楽を求める自己との対峙を描き、前者をどのように蘇らせるかを考えさせる。このような基本的な人間の本性から出発する思考の重要性を紹介する。

●これまで、国内だけでなく、他国の ASPnet 校がどのように活動しているかを知る機会がなかった。ソウルでの研修会で Yu Cheol 先生からの韓国 ASPnet の活動紹介があったことで、日本の側の教員にとって改めて国際ネットワークであることが伝わる重要な機会となった。この発表内容を大阪ユネスコスクールネットワークでも共有したい。

B-02　浅野 智宏

（岡山市立三勲小学校教諭）

「一人の人間は微力であるが無力ではない」

「日本の学校を参考にして〇〇というポジションをつくりました。」幸福学校での教職員間の質疑応答の際、以前日本訪問プログラムに参加された韓国教職員の方の発言だった。当たり前のようであるが身が引き締まる言葉だった。この方は日本訪問プログラム後に、実際に行動を起こし、自分の学校に変化をもたらせていたのだ。

私はこのプログラムを通じて多くの方とつながりを構築し、多くの知識を得た。しかし知識を持ち帰るだけでは意味はない。我々それぞれが日韓両国の良好な関係づくりや日本の子どもたちのために学んだことをどう活かすか、どんな行動を起こすかということこそ、本プログラムでの重要なことだと気付くことができた。

「一人の人間は微力であるが無力ではない」、韓国にも「티끌 모아 태산(ちりが集まって泰山)」ということわざがあるという。一人ひとりの力は微力かもしれないが、本プラグラムで学びあった日韓の参加者がそれぞれ力を発揮することで、お互いの国を、そして世界をよりよいものに変えていくことができると信じている。本プログラムで得た多くの方とのつながりをエネルギーとして、微力な一人として行動を起こし続けていきたい。

今後の活動予定

●韓国の紹介（成果発表）
- ・校内研修会で本プログラムの内容と成果を発表する。
- ・児童集会で全児童に韓国について紹介する。
- ・国際理解教育の視点で韓国をテーマに授業（外国語活動、図工）を実施する。

●韓国の学校と交流をする。
- ・今回つながりを得た方々を通じて、韓国の小学校と交流を始める。

●韓国の教育システムの研究
- ・本プログラムで得た韓国の教育システムについて、さらに文献やつながることができた方々に直接質問するなどの方法を使って研究し、勤務校にて導入可能なものについて検討し、提案していく。

●実践発表
- ・岡山県国際理解教育研究会・県大会や各研究会にて本プラグラムと帰国後の実践について発表し、岡山県内の国際理解教育、ESD に関わる教員に成果を広める。

B-03　有田 桃子

（徳島県板野郡藍住町立藍住北小学校教諭）

（写真右手前）

「心紡ぐ『あなた』と『わたし』」

私のホームビジット先の先生は、非常におもてなし精神に溢れた方で、蔚山公園から始まり、ご自身の勤務校や地域の図書館なども案内してくださった。チマチョゴリも着させていただき、多くの生活や文化を体験することで、いっそう韓国を身近な国として捉えることができたように思う。帰国後も連絡を取り合っているが、お互いの教育実践に向けて、今後もさらに交流を深めていくつもりである。また、本プログラムを通して、日本国内や韓国の志高い先生方の教育観に触れられたことは、私にとっての大きな財産である。多くの人たちとの素晴らしい体験と出会い、それらはひとつひとつ確実に私の宝箱にしまわれていった。国際相互理解に向けて、国境を越えた一人の人間として互いを尊重しあう精神を大切にしていきたい。そして、共に豊かな未来へ向けて歩んでいけるよう、私自身が今後も世界に視野を広げ続けられる生き方をしていこうと思う。私の宝箱は今、溢れんばかりに満たされている。それらが今後も絶えず輝きを増し続けられるように、今回学び得たことを、教育実践の場に積極的に生かしていきたい。

今後の活動予定

●現在、小学校で３～６年生を対象に外国語の授業を担当しているので、授業の中で異文化理解の一環として、今回韓国で学び得たことを伝えていきたい。例えば、小学校での授業や子どもたちの様子、ホームビジットでのふれあいの様子、韓国の文化についてなどである。パワーポイントで写真を提示したり、実物を見せたりすることで、私自身が韓国で体験したことをできるだけ臨場感をもって伝えていきたいと思う。

また、教職員に対しては、校内研修の時間を設けていただき、韓国の教育事業や韓国の教職員の方々とのふれあいを中心に紹介したい。加えて、ESD の推進を啓発すると共に、よりグローバルな視野を広げられるように呼びかけていきたいと思う。

●私自身が絶えず世界に目を向け続け、自己研鑽の精神を忘れずにいたい。韓国のみならず他の国の文化や教育についても、より積極的に視野を広げていきたい。また、教職員組合に所属しており、そこで部長も務めているので、ESD やユネスコスクール、グローバル社会に向けての学習を呼びかけ啓発していきたいと思っている。

B-04　飯干 望

（横浜市立永田台小学校教諭）

「人とのつながりから生まれる教育の可能性」

本プログラムでは多くの人との出会いから学ぶことが多かった。人の対話から感じ、考えることが、次への行動を見出せると私は考えている。

ずっと大事にしたい人との縁が生まれた。それは、ホームビジット先となった、沈珠瑛先生との出会いだ。珠瑛先生は、昨年度の日本訪問プログラムに参加をしている。「日本に訪問したときにお世話になったから恩返しをしたい」という思いがおもてなしの心の温かさから感じることができた。対話をする中で、「子どもたちに他文化のよさを知ってもらいたい」「ESD を子どもたちと共に取り組んでいきたい」「地球規模的課題を教育の力で一歩ずつ解決していきたい」という共通の思いがあることがわかった。そして、私たちは、お互いに子どもたちへのメッセージビデオを取り合い、交流計画を立てることができた。私たち教員のつながりから、子どもたちのつながりが生まれた瞬間であった。近いようで遠かった韓国がぐっと近くなり、共通の思いをもって子どもたちと共に日々過ごしていることに、勇気と今後の可能性の広がりを感じた。

今後の活動予定（抜粋）

●韓国の学生の平和への思いから考える平和とはなんだろう【全校朝会】

韓国の学生が平和は、友だちを大切にすることから始まると考えていた。そのことを全校児童に伝え、身近な平和が世界平和につながることを考える時間を設けたい。

●担当龍湍小学校の１年生との交流【学年】

互いのクラスの自己紹介ビデオから交流がスタートする。学校紹介、伝統的な遊び、歌、の紹介などを通して、韓国の文化を知り、紹介することで自国の文化のよさも実感してほしい。

●韓国の文化紹介【希望のある学年、クラス】

韓国学校文化、食文化をとおして、日本と韓国の同じところ、違うところを知ることで韓国への関心を高める。

●教員自主サークルでの韓国の学校文化や教育制度の紹介

韓国の学校文化や教育制度を伝えることを通して、日本教育の可能性を共に考えていきたい。

B-05　生杉 真美

（徳島県阿南市立桑野小学校教諭）

（写真右手前）

「つなげる！グローカルな人材を育てる」

韓国では、厳しい社会の状況を生き抜くために自分の興味関心を元によさをのばしていく教育が行われていた。数々のプログラムの中で韓国の先生方と個別に交流することは貴重な経験となった。気軽に話すことで、同じ教育に携わる者個人としての考えや熱い思いをお互いに感じることができた。

それとともに、全国から集まった先生方との出会いは非常に有意義だった。刺激的で濃密な時間を過ごす中でいろんな面からアイディアが湧き、モチベーションが高まった。

普段は目の前のことでいっぱいになりがちだが、この１週間の学びは自分の視野が広がり教育観を見つめなおすきっかけとなったことが一番の収穫である。郷土への愛情を育むとともに、多様な価値観への理解と国際的な視野を持つために、どのようなことが自分にできるのかをしっかりと考え、学び続けたい。出会いをつなげ、学びをつなぎ、未来につなぐ、持続可能な世界をつくるグローカルな人材を育んでいきたい。

今後の活動予定

●職員研修で時間をいただいて、学びを伝える。韓国の教育制度や文化理解を進めるとともに、地球規模でみる ESD や GCED についても啓発できるようにしたい。

担任をしている児童には授業でとりあげ、韓国についての理解を進めるとともに相手を尊重する気持ちを育てたい。自分が生活をする場で全く文字が分からない状態がいかに不安か、危険かということについても伝え、識字の問題にも触れ、人権問題とつなげ考えさせたい。また、全校の児童に対して、集会でパワーポイントを使って、韓国の文化や学校の様子を伝える予定である。

●同期の人と話をし、見てきたものや学びを共有する場をつくる。

B-06　稲垣 顕子

（八千代市教育委員会指導主事(主査)）

（写真前）

「未来を見つめた教育を」

私たちは 1 人の子どもと，どのくらいの時間を共に過ごし，その成長を近くで見守ることができるだろうか。学校訪問で韓国の教育を学んだり，ホームビジットでご家族と交流したりする活動を通して，これからの教育について改めて考えた。

幸福学校では，長期的なビジョンの下，障害の早期発見から職業訓練・就職と，学校・社会・企業との連携による教育がなされていた。また，貞媛女子中学校では，自由学期制の教育課程において，生徒主体の学習活動が行われていた。主体的な活動の中でこそ，思考力や判断力，表現力は培われる。この活動を通して育まれた力は，彼女たちの将来の自己実現における土台になるに違いないと感じた。

持続可能な発展のための教育を目指す際には，教師が 10 年後，20 年後・・・と，未来にどんなイメージを持っているのかが大きな鍵である。未来をイメージするとき，自ずと「世界のなかで共に歩む日本」を考えなくてはならない。教師自身が，アンテナを高くして世界に目を向け，各国の教育事情について知ることは，教育に変化をもたらすと感じている。

今回の出会いを大切にし，韓国を通して世界を，そして未来を見つめる目を大切にしていきたい。

今後の活動予定

●韓国訪問プログラムについての報告会の実施

●韓国教職員との交流の継続

●今年度，本市において ICT 機器の充実が図られる，パソコン機器の更新，全校にタブレットの配布，またスカイプを使ったテレビ会議等も想定されている。スカイプを通した児童生徒の交流，またテレビ会議や合同授業など，教育交流を通して両国の児童生徒にとって多様な学習体験が可能であると考える。

B-07　大塚 厚

（奈良市立春日中学校教諭教諭）

（写真左手前）

「国際理解のために必要なこと」

今回のプログラムで有意義であったことは、韓国の先生方や学生の考えに直に触れることができたことだ。

「自由学期制」などについて意見交流する中で見えてきたのは、新しい制度と子どもの実態、そして受験との間で揺れる教師の姿、「働き方改革」の実際、生徒の問題行動に頭を抱える教師の姿であった。それは日本の教師と重なるものであり、それが互いにわかったとき、初めて本当の笑顔になれたように感じた。

また、ホームビジットでお世話になった先生に案内していただいた高校で、生徒の机に日本のアイドルグループの名前（それも漢字で）の落書きを見つけたことも印象的であった。現在私の勤務する中学校では韓国のアイドルは特に女子生徒の間で人気があり、ハングルで書かれた落書きを見ることも少なくない。「国は違っても同じことをしているよ」とその机に座る生徒に伝えたときの嬉しそうな笑顔が、国際理解に何が必要かを教えてくれたように感じた。もし、韓国の先生方や学生と出会い、交流することが無かったら、「教育先進国韓国の教師」や「反日色が残る韓国人」などのラベリングされた韓国像から脱することは難しかったかもしれない。韓国の先生方や学生もまた同様であろう。

習慣や文化が違っても、課題意識や心惹かれるものには共通点がある。このことに気づくことが国際理解、他者理解の第一歩ではないだろうか。

ユネスコ憲章がめざす、「人の心の中に平和のとりで」を築くとは本プログラムのような交流を通じて、相互理解を深め、無知と偏見を越えてゆくことであると改めて感じることができた。カムサハムニダ。

今後の活動予定

●国際理解教育や多文化理解教育において大切なことは、国境や文化を越えて共通するものを見出していくことであると今回のプログラムを通じて改めて考えた。最も根本的なところでは、家族を想う気持ち、ふるさとを想う気持などである。そのようなことに気づけば、自他を同じ視点から捉え始めることができるはずである。ここから、平和学習や環境教育、国際理解教育が始まる。それはすなわち ESD や GCED である。このような視点を日々の授業に生かしていきたい。

●学年集会や全校集会での報告会の実施

B-08　小吹 耕平

（千葉県八千代市立西高津小学校教諭）

「繋がった仲間。世界へのスタート地点。」

私は本プログラムでたくさんの繋がりをつくることができた。本プログラムに参加した訪問団の皆さん。韓国で関わった先生方、ACCU の方々である。ほとんど千葉県内にしか関わりのない私が全国に、韓国につながりを持つことができたことで自分に大きな変化をもたらした。

韓国の先生方とつながりを築くことで見えてきた、韓国の教育と日本の教育の共通点や相違点。特に印象に残っている「自由学期制」は、子どもたちの自主性を育む大きな役割を担っていることがわかった。また、国による大きなサポートも日本とは異なる部分である。韓国は、新しいものを取り入るスピードが速い。そのような国のシステムにも驚かされた。

日本の訪問団の皆さんにも大きな刺激をもらった。ESD 教育を積極的に行っている学校が多くあり、たくさんの実践を聞くことができた。また、同じ日本でも、それぞれの県の教育に特徴があり、非常に興味深い話をたくさん聞くことができた。

たくさんの繋がりから多くのことを学んだ 1 週間。ACCU の方々のおかげでとても実りのある時間となった。私にとってこのプログラムはスタートである。これからもこの繋がりを教育に生かし、さらにほかの世界へも繋がりを広げていきたいと考えている。

今後の活動予定

●韓国について、全校集会や先生向けの研修を開き、伝えていきたい。

●今回のプログラム参加をきっかけに、ESD の研修に自主的に参加し、学んだことを広めていきたい。

B-09　梶山 茜

（大阪市立晴明丘小学校教諭）

（写真左から２人目）

「韓国からも日本からも学ぶ」

今回の訪韓プログラムにあたって、韓国の先生方からたくさん学んで帰ろう、という気持ちで臨んだが、韓国の先生方だけでなく、一緒に参加した多くの日本の学校の先生方からも学ぶことがあった。特に蔚山広域市彦陽小学校での懇談会では、韓国の学校での ESD の取り組みや ASPnet 校としての活動についてたくさん教えていただいた。同じ公立小学校の先生ということもあり、話題が尽きることなく話し合いが進められた。また、韓国の先生方も日本の教育に関心を持っており、質問をしていただいた。日本の先生が答えるときに、自分のいる地域ではしていないこと、初めて聞くこともあり驚いた。

それぞれの地域で取り組む活動は違っても、つながる先は「子どもたちのために」という思いであった。子どもたちの未来のために、できることに熱い気持ちで取り組む先生方の姿勢は同じである。万国共通の思いから学び、経験となることが多くあった。

今後の活動予定

●全教職員向けに、今回のプログラムで見たことや感じたことを伝える報告会を開く。また、校内でもやってみたいと思った韓国の学校で行っている活動や環境の整え方などを試す。

●これまでも何度か本校には、海外から教職員団や児童生徒が来ている。その際にもおもてなしの気持ちをもって日本の伝統文化を伝えられるような歌や演奏をする歓迎会を開いたり、授業参観をしていただいてきた。今回の訪韓プログラムでも同じようにおもてなしの心が伝わる会を開いていただいたり、懇談会の準備をしていただいたので、これからもそのようなことができるようにしたい。

B-10　加藤 佳子

（豊田市立加納小学校教諭）

（写真右）

「持続可能な取り組み」

あっという間の１週間であった。多くの学校を見学し、子ども達とふれあうことが出来たことがとても有意義であった。どの学校のどの場面でも、目が輝き、生き生きとした子どもたちの姿が印象的であった。どうしたらそうした子どもたちの姿となるのか。それは、先生方の創意工夫による、子どもたちが主体的に取り組めるさまざまな仕掛けがされていたことが最大の要因ではないだろうか。好きな事、興味があること、自信がもてることをさらに伸ばすカリキュラムが構築されることで実現する。さらにそれらを主体的、対話的に作り上げていく経験をした子ども達は、その経験と成就感と得た自信を次への挑戦に変え、さらに深化していく。それは、教師も含め、持続可能な理念を実現させることでなしえたことであろう。実際に子ども達とふれあい、現場の先生方と交流させていただいたり、教育庁から直接お話を聞いたりすることで多くのことを学ぶことが出来た。このプログラムでしかできないすばらしい取り組みに感謝したい。

今後の活動予定

●国際週間が９月に予定されている。毎年行っているカナック小学校だけでなく、韓国の取り組みの良さを児童にも伝える予定である。好きな事に挑戦することのすばらしさ、平和への願いはどの国でも同じであることなどである。職員には、持続可能な取り組みについて、実際に取り組んでいる内容についても意識をもつことについて話しをしていきたい。

●今まで行っているソウル市のカナック小学校との交流について、負担なく取り組めるように計画を再考したい。訪問できる児童は限られているので、全校での会話の練習や、スカイプを利用して訪問できない児童も交流できるようにしてはと考えている。

B-11　口岩 竜馬

（石狩市立南線小学校教諭）

（写真右）

「涙を超えて」

「隣の遠い国」それが私の韓国への印象であった。昨今、情報過多時代とも言えるほどの多くの情報から、日韓両国の関係というのは敏感にならざるを得ない状況である。子どもたちに国際理解教育を進めていく中で、避けては通れない国であるとも感じていた。国と国となると思う所は両国にあると思うが、それが果たして個人個人としてはどうなのであろうか。今回の訪問で、「人のつながりの大切さ」に改めて気づく事ができた。韓国の先生たちの子どもや教育に対する熱い気持ちや、ホームビジットでの本当に温かい心からのもてなし。日本人・韓国人ではなく、地球に生きている一人と一人としてつながれた事が今回の大きな成果でもあり、感動的な体験であった。ホームビジットの最後にホストファミリーの方がくれた言葉「私は日本も好きだし、あなたも好きですよ！」の言葉は永遠に忘れられないものであり、涙するものであった。今回のプログラムでは全体を通じ、韓国の教員の方との交流を非常に多く持つことができ、大変有意義なプログラムであった。

今後の活動予定

●教員向け研修「韓国の教育・行政・授業実践の様子報告」8 月 17 日(金)予定
●授業実践「隣の国 韓国」全 7 時間 12 月 4 日 公開授業
●北海道国際理解教育研究協議会石狩支部 管内研究大会公開授業・事後研 12 月 4 日（火）予定
●北海道開発教育ネットワーク 実践交流会での交流

B-12　小出 瑞紀

（千葉県立千葉盲学校教諭）

（写真左）

「ともに」

共生社会の実現―これは、特別支援教育にとって重要な目標である。今回のプログラムを通じて、大切にするべきことは何か、学んだことがある。

今回のプログラムでは、知的障害を対象とした特別支援学校である、幸福学校を訪問した。実習等での外部機関との連携や、地域住民を学校に招待するなどの取組は、先生方の「この子たちのことを伝えたい。」という熱意を感じさせるものだった。

また、ホームビジットもとても印象に残っている。お世話になったご家庭には、小学校 2 年生の息子さんがいた。一緒に伝統的な遊びである、「ユンノリ」で遊ぶことで、心の壁がどんどんなくなっていったように感じた。言葉もコミュニケーションの大切な手段であるが、同じ場面を共有することも大切なことだと感じるものであった。

今回のプログラムを通して、時間や空間を共有し、一緒に活動することは、民族や言語を超えて、相手を理解することができる、共生社会の実現の第一歩であることを感じた。

今後の活動予定

●韓国の文化や伝統について、地理や世界史の授業等で扱う。

●校内の職員に向けて、本プログラムで学んだ、韓国の教育制度について伝える。

●本校はこれまで、ICT 機器を使用した国際交流を行ってきた。韓国との教育交流を行う場合も、ICT 機器を使用した交流を行うことができる。韓国の高校生が修学旅行等で日本を訪れた際に、受け入れることが可能である。

B-13　杉山 千夏

（山口県立下関総合支援学校教諭）

「情熱」

留学の経験もあり、長い間関心を寄せてきた韓国。今回のプログラムで、「教員」として「教育」を学ぶために訪れることができたことは非常に感慨深かった。

貞媛女子中学校では、いきいきと、堂々と演劇やダンスに取り組んだり、文化授業で楽しそうに私たちと交流したりする生徒の様子を見ることができた。各訪問校における現地の先生との意見交換では、それぞれの先生の教育に対する熱の高さを感じた。ホームビジットでは素敵な家族に出会い、互いが愛し合い支え合う原点的な家族のかたちを目の当たりにした。日本から参加した先生方の姿から、自分が教員として、一人のひととしてどうなっていくべきかを考えた。

さまざまな「情熱」にふれたことで、私自身の心の熱も高くなったような気がする。これから、勤務校の教員に学びを還元し、子どもたちの教育に生かしていく決意である。本プログラムでの経験、そして多くの方々との出会いをこれからもずっと大切にしていきたい。

今後の活動予定

●韓国への理解および日韓相互理解を促すような授業の実施
●教員向けの研修報告
●日韓の先生や家族と、個人的に交流を続ける
●以前から続いている作品交流の継続
●ICT を活用した、児童生徒が直接顔を合わせられるような交流
●韓国教員の学校見学受け入れ
体制が整っているとはいえないため、実施については未定。

B-14　倉田 奈生子

（斜里町立朝日小学校教諭）

「文化が国境を越えた瞬間」

8 日間のプログラム。それは、26 年間の教師人生の中で最も刺激を受けた 1 週間だった。韓国の教育・学校・子供、どれも有意義で興味深いものだった。先生方と話しているうちに、国は違っても子どもへの思いや教育への熱意は共通していると感じた。子供達も元気で笑顔がとても可愛く、遊ぶ姿も学ぶ姿も日本の子供たちと同じだった。相違点もあるが、とても親近感を抱いた瞬間だった。貞媛女子中学校で文化授業を担当させてもらった。当初、日本の伝統楽器とリクエストを受け、「箏」で授業をしようと考えたが、大きすぎたため、よさこいソーランを幹とした授業をした。口岩先生と一緒に「日本の祭と子供」について、講義と実技を行った。鳴子と法被を用意し、踊りを教えながら一緒に踊っていくと、生徒たちに笑顔が溢れた。当然、こちらも笑顔になる。生徒たちはすぐに踊りを覚え、踊れるようになった。言葉の壁はあっても、それを越えた瞬間だった。

今後の活動予定

●児童への報告（全校朝会で）
●学校だよりで報告
●自校及び近隣ユネスコスクール対象の報告会
●ESD の促進

B-15　辻 真実

（千葉県八千代市立大和田小学校教諭）

「かけがえのないもの」

今回の韓国の訪問で、かけがえのないものをたくさん得ることができた。

１つ目は、韓国の教育を知ることができたことである。放課後スクールの実施や教育のスローガンを掲げて地域・学校・家庭が一体となって教育を行っていく制度など、初めて知る取組がたくさんあり、教員としての視野を広げることができた。

２つ目は、ESD の視点での教育である。学校や施設を訪問したり、たくさんの先生方とお話をさせていただいたりする中で、ESD の素晴らしさを知り、その視点で教育を行っていくことが子供たちの未来に大いに繋がることが分かった。

３つ目は、韓国の先生方や日本の先生方との出会いである。国や住む場所は違えども、子供たちを大切に思い、子供たちの未来のために日々努力している姿に感銘を受けた。

この経験はかけがえのない宝物であり、私の教員人生において大きな影響を与えてくれるものであった。今回の出会いを大切に、今後も交流を続けていきたい。

今後の活動予定

●学級での授業
●学校の集会活動での報告
●職員への報告会
●教育長への報告
●韓国の先生との交流
●手紙のやり取り
●ICT 機器を活用したテレビ電話
●学校訪問（式典、交流会、授業参観、授業交流など）
●ホームビジット

B-16　長尾 健太郎

（愛知県立みあい特別支援学校教諭）

（写真左）

「プログラムを通して学んだこと」

一週間という長いプログラムを通して学んだことは大きく 3 ある。1 つ目は韓国の教育を実際に見たり聞いたりできたことである。中でも幸福学校の訪問はとても衝撃を受けた。熱烈な歓迎に、充実した施設、児童生徒一人一人の自立と社会参加に向けて恵まれた環境だった。日本の特別支援教育も思い切った改革が必要だと勇気をいただける訪問であった。

2 つ目は日本全国の先生方と知り合えたことである。一週間行動を共にし、ときに熱く語り合うことで年齢や肩書を超えた仲間意識が芽生えた感じる。このつながりを大切にして、それぞれの場所で活躍したい。

3 つ目は会議進行係として多様な人たちをまとめていくことの難しさを経験できたことである。プログラム中、報告会に向けての準備やバスの中での振り返りなど中心となって進めていく場面が多くあった。初めて会う多様な人たちをまとめていくことは本当に大変だったが、これからの社会はまさにこの多様な人たちをまとめる力が必要と感じる。大変ではあったが有意義な時間を過ごすことができた。

今後の活動予定

●職員会議などで報告し、情報を共有する。

●授業や学校生活の中で韓国の学校について話し、生徒が日本だけでなく外国を意識するきっかけとする。

●母校（大学）の教育実践レポートに寄稿し、活動を紹介する。

B-17　住田 昌治

（横浜市立日枝小学校校長）

（写真右）

「韓国の教育改革と学校」

韓国のすべての学校が今回訪問したような素晴らしい施設で特色ある取組をしているのではないかもしれないが、日本では考えられないような教育環境が実現していることに驚いた。日本と同じような社会課題を抱え教育改革に取り組んでいるのだと思うが、政府が教育の重要性を強く認識し、力を入れていることが分かる。入試制度、学区制、自由学期制、過程評価、働き方改革、放課後教室等々、枠組みを変えないで、教育改革を進めるのではなく、教育制度にメスを入れ、根本的な改革に取り組んでいることが素晴らしい。「新しい葡萄酒は古い革袋に入れてはならない」と言われるが、まさに「新しい葡萄酒を、新しい革袋に入れる」ということが実現されようとしている。韓国の教育改革が今後どのように進められ、実績を上げていくか興味をもって見ていきたい。また、日本の教育改革がこれまで十分に行われてこなかったことへの認識を新たにし、学校現場で何ができるのかを考え、主体的に教育変革を推進していきたいと思う。

今後の活動予定

上記の通り、韓国の教育改革、学校の教育環境等から学んだことを、日本の教育現場に取り入れていく。もちろん、大きな制度改革がなされない中なので、学校現場でできるソフト面での変革を可能な限り行っていくようにする。日本では、「チーム学校」という表現で、学校にかかわる人を増やすことと、現在いる人を有効に活用することが考えられる。予算配当がない中、学校の頑張りに任さられている現状から、無理のないよう、負担のないよう、質を保証していかなければならない。できることとして、日課表の見直し、行事の見直し、働き方の見直し、学校の雰囲気づくり、放課後の学習、そして、学校の在り方については、すぐに手を付け、変えていかなければならないと思う。

B-18　西原 隆博

（静岡県伊豆市立天城中学校教諭）

「近くて遠い国から、身近な国になった韓国」

私にとって韓国は、「近くて遠い国」というイメージがありました。今回このような機会を得て、「近くて遠い国」から、「近くて親しい国・親しみのわく国」になるよう、自分の目で見て、自分の耳で聞いて理解することで、新しい発見をたくさんして帰りたいと思い、訪問団に参加しました。

その思いがこの研修を通して見事に達成されました。教育庁訪問、小中学校と特別支援学校の訪問を通して、韓国が目指している教育の方向とその実践の現場を見ることができ、日本の教育が抱える課題との共通点や相違点を学ぶことができました。未来に生きる子供たち、多文化社会を生きていくこれからの子供たちに、何をしていかねばならないのかを「世界市民教育」「自由学期制」から学び取ることができました。ホームビジットでは、韓国の家庭の様子がわかり、お子様との会話からは学校の様子が分かり、楽しい一時を過ごすことができました。KNCU の方々の大変なご努力により、1 日経つ度に深い学びを体験することができました。ここで感じたものを職場で広め、地域で広めていけるよう努力していきたいと思います。

今後の活動予定

●全校生徒に、韓国政府の招聘で自分が本校を代表して参加したことを、全校集会で、授業の中で伝えていく。

●韓国政府の招聘で自分が本校を代表して参加したことを、市の研究集会で話していく。

B-19　林 英樹

（岐阜県揖斐郡温知小学校教頭）

（写真左）

「出会い・再会」

8 日間における招へいプログラムを終えた今、最も有意義であったと感じていることの一つとして、日韓教職員のネットワーク構築・強化についてである。人との出会いと交流である。

活動を共にした日本全国から集まった職員との交流によって、国内でさえ教育活動や課題に違いがあることを理解できた。また、遠く離れた職場で、それぞれがそれぞれの立場で ESD や GCED を実践している仲間を得たことは、私の大きな財産になった。

半年前に本校を訪問していただいた韓国の教職員の再会も、かけがえのない喜びである。8 名の方が私の訪韓を知り、2 時間以上かけて会場へ駆けつけた方々、夜遅くホテルのロビーで私の帰りを待っていた方... なんて心温かいステキな人たちと交流できたのだろう、今後もこの出会いと再会を大切にしたい。

今後の活動予定

●職員打合せにて、本校の実態に応じた内容を報告していく。
　単に韓国の教育事情を紹介するのではなく、日韓共通の課題として捉えられる事例に関して、韓国でのよい例を取り上げて解決の糸口にしたい。

●全校集会にて、プレゼン報告する。

●今回の訪問団として知り合えた方々との情報交換や交流
　訪問団の方々が自校でどのような活動をしているのか、お互いに情報交換を行い、自分の活動の参考にしたい。

●外国語活動において、世界の国紹介コーナーで児童に報告する。
　児童に対しては、主に興味関心を高め、隣国の文化に対する知識理解を深めていきたい。

●本校はユネスコスクールに加盟していないが、卒業後進学していく校区の揖斐郡池田町立池田中学校、あるいは岐阜県立池田高等学校はユネスコスクールに加盟している。8 月 4 日に池田町の教育事例発表会が開催される。池田中学校、池田高等学校ともにユネスコスクールの活動に関わった発表をする予定である。小学校としては、中学校・高等学校の発表内容を観ることによって職員の見解を広げ、今後の外国語活動・福祉活動・キャリア教育に生かしていきたい。

B-20　廣川 貴志

（北海道旭川市立近文第一小学校教諭）

（写真左）

「ビジネスカジュアルと私」

最も有意義であったのは学校訪問だった。学校へ一歩足を踏み入れると、周りの先生方の顔つきが変わったのがわかった。やはり教員である我々は子どもたちを前にするとスイッチが入る。

見せていただいた学校はどこもハード面での充実を感じた。校内にゆとりのスペースが多くあり、そこが子どもたち居場所になっているようだった。特に幸福学校で見た「クールダウン」のための部屋は、通常校においても必要性を感じるものであった。また、彦陽小学校でのプログラミング学習や貞媛女子中学校でのヒップホップダンスや英語でのミュージカル発表など、参考になる取組を多く見ることができた。

日本だと学校は「勉強するところ」になりがちだが、韓国では「質の高い生活をするところ」になっているように感じた。同じようで違う、違うようで同じ、似ているところ、似つかぬところ、目にするもの全てが刺激的で興味深かった。そして、何より子どもたちのいきいきした表情がとても印象的だった。

今後の活動予定

●教職員向け報告会で韓国の教育事情や子どもたちの学習の様子などについて紹介する。
●第４学年を対象に総合的な学習の時間で「韓国の学校」を主テーマにした国際理解の授業を行う。（全４時間）
●旭川市教育研究会国際理解教育班で報告をする。

B-21　藤田 有記

（熊野町立熊野第一小学校教諭）

（写真中央）

「これからも大事にしたい出会い」

20 年前、私はトランジットで 3 日間韓国を訪れていたが、韓国に対して実はあまりよい印象をもっていなかった。しかし、今回の訪問で大きく印象が変わった。それは、韓国の様々な人と実際にお話をし、その温かさに触れたからだ。どこの場所、どの学校に行ってもあたたかい雰囲気、最大限のおもてなしを受けた。そして、どこに行っても大雨土砂災害のあったことに対しての心温まる気遣いのお言葉をかけてくださった。また、至る所に歓迎の日本語の文字の横断幕や看板、資料もすべて日本語で書いてあり、さら飲み物やお茶菓子や果物で迎えてくれた。相手を思いやる優しさを学ぶことができた。特にホームビジットのソンさんは、私たちを心から歓迎してくれ、充実した時間をもつことができた。互い国の教育事情や文化のこと、生活様式のちがいや学校のことを話すことができた。そして、子供たちや教育に対する熱い思いは日本も韓国も同じであるということがわかった。偶然出会った私たちではあるが、国境を越え、教員として何か子供たちや未来のために互いにできることが何かあると感じている。まずは、私が感じた韓国での素敵な経験、学んだことを子供たち、先生方に発信し、韓国のことに興味をもってもらいたい。韓国での出会いや経験はすべて宝物で、これからもずっと大事にしてつながっていきたいと考えている。韓国で出会った人、このプログラムに関わってくれた人すべてに感謝している。

今後の活動予定

●韓国の文化・学校・食・町の様子・動画などを PPT などで、紹介する。
●外国語活動の授業において、子供たちにハングル語で自己紹介ができるように練習し、小学校に ICT を使って配信する。
●学校の掲示板に韓国のことを紹介するコーナー韓国の英語の教科書を紹介するコーナーを作る。
●校内・町内の教職員との情報の共有
以上の活動を通して、韓国への興味関心を高め、互いの共通点や相違点を理解しようとする態度を育成し、つながりをもちたいとという気持ちを持たせる教育を行っていきたい。

B-22　森田 真好

（多摩市立愛和小学校主幹教諭）

（写真左）

「ターニングポイント」

今回のプログラム参加は、私の人生にとって非常にインパクトが強く、大きなターニングポイントになったと思う。その要因の一つは、「他国（韓国）の文化に触れた」ことである。海外旅行の経験がほとんどない私にとって、今回のプログラムの全てが「百聞は一見にしかず」であった。韓国の様子、文化、教育機関など、わずかな一面ではあったと思うが、驚きと発見の連続であった。「やっぱり日本の方が〇〇だね。」と、日本の良さや課題に気付くには、日本と比較できる対象を実際に見聞きし、肌で感じることの大切さを強く感じた。

そして、もう一つは、「人との出会い」であった。準備段階から手厚くサポートしてくださったACCUの方々や韓国で歓迎してくださったKNCUの方々の温かさと一生懸命さには、強く心を打たれた。さらに、このプログラムで全国から集まった教員の方々は非常に魅力的だった。この出会いを今後も大切にしていきたいと強く思った。

今後の活動予定

●担当している子供たちに、韓国の様子を伝えていきたい。「学校の様子」「学校生活、学習の様子」「食べ物」「町の様子」「韓国語」など、写真も交えながら詳しく伝えたい。また、海外旅行での学びは、普段何気なく過ごしている日本を知ることになる。日本や自分の生活を改めて見直す機会になることを伝えていきたい。「日本がいい。」という言葉は、日本以外の国や地域を見聞し、感じたからこそ分かることであり、日本を知るためにも、海外旅行のチャンスは逃さずに行くことを勧めたい。

●職場の同僚にも「ミニ報告会」を開きたい。１週間という長い期間の研修を勧めてくれた管理職や、抜けた仕事や授業をフォローしてくれた同僚にも感謝の気持ちを込めて、学んだことを報告していきたい。

●知り合いの教員や仲間にも積極的に伝えていきたい。韓国を見聞したからこそ分かった「日本の良さと課題」を伝えたり、意見交換の材料にしたりしていきたい。

B-23　吉原 康予

（奈良市教育委員会事務局指導主事）

（写真左から２人目）

「韓国訪問で学んだこと」

私にとって初めての韓国訪問であった。韓国を訪れる前までは、教育に関してエリート養成を目的としているという印象をもっていた。しかし、教育庁や各校種を訪問し、学力だけでなく、個々の個性を伸ばす教育に力を入れていることが分かり、大変勉強になった。

ソウル特別市、蔚山広域市の教育庁や学校を訪問することができ、先生方と直接対話することを通して、多くのことを学ぶことができた。「自由学期制」という制度が興味深かった。自由学期制を導入している貞媛女子中学校の生徒達は、意欲的に学習に取り組む様子が伺えた。また、個別の子ども達の学びを実現するために、訪問したどの学校も多岐にわたるプログラムがあることや研修の機会や環境が整っていることは日本も見習いたいと感じた。子ども達の才能を最大限に伸ばす環境が整っていることに素晴らしいと思った。まだまだ試行錯誤の面もあるようだが、教育に対する韓国の教員の熱意とパワーを感じ、その姿に学ぶべき点は多々あると感じた韓国訪問であった。

今後の活動予定

●韓国の教育について、学校訪問や研修などを通して伝える。

●この度の研修で知り合った参加者と、今後も情報共有しながら、それぞれの教育現場で取組を生かせるよう交流を続けたい。

●韓国教職員団の受入れ

小学校、中学校を訪問していただき、児童生徒及び教員との交流を行いたい。

学校スポーツ（部活動等）の様子を見学いただき、意見交流を行いたい。

世界遺産に関して、施設見学を行い、文化的な交流も行っていきたい。

事業担当者コメント

2018 年 7 月は西日本を中心に豪雨の被害が大きく、大変な状況の中、ご参加くださった先生が何名かいらっしゃいました。教え子をなくされた先生は、すでに参加が決定したこのプログラムに穴を開けまいと、悲しみを見せることなく、気丈に振舞っており、そのことが最初の印象として強く残っています。

ACCU からは職員 2 名が訪問団に加わり、韓国でともに学ばせていただきました。韓国到着後は 2 グループに分かれ、ソウル、慶尚南道（A グループ）、蔚山広域市（B グループ）、釜山を訪れ、教育に関係するさまざまな立場の方々とお目にかかることができました。教育に力を入れる地方都市や韓国の家庭を訪問するホームビジットを含め、充実したプログラム内容をご準備くださった韓国ユネスコ国内委員会、韓国教育部をはじめとした関係機関の皆様に、あらためて感謝を申し上げます。

訪問団は日を追うごとに結束が増し、限られた時間の中で報告会の準備を進め、各訪問先ではそれぞれの役割をこなし、温かくお迎えくださる韓国側の気持ちに応えていました。私がともに過ごした B グループは、朝のバスの中で長尾健太郎先生の健康観察や連絡事項にはじまり、小吹耕平先生の音頭による「花は咲く」の全員合唱が毎日繰り返されました。さらに、一人ひとりの先生方の心遣いがプログラムに花を添え、絆を強くしました。

最後は釜山で全体の報告会があり、A グループは「新しい学力」を中心とした内容、B グループは歓迎レセプションで披露した歌「花は咲く」と結びつけて、各地での教育政策・現場について報告しました。高校の先生が中心の A グループ、小学校・特別支援学校の先生が中心の B グループ。各グループの「色」で、お互いの学びを共有し合う様子は舞台のごとく、見ごたえがありました。このプログラムは、韓国とつながるだけでなく、日本の教職員同士が、刺激し合える貴重な機会でした。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
伊藤　妙恵

付録

これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2003 年 3 月 16 日～20 日	ソウル、慶州、釜山	11 名
2004 年 6 月 13 日～18 日	ソウル、慶州、釜山	16 名
2005 年 9 月 5 日～13 日	ソウル、慶州、釜山	24 名
2006 年 6 月 11 日～18 日	ソウル、光州、釜山	25 名
2007 年 6 月 10 日～17 日	ソウル、大田、清州、慶州、釜山	29 名
2008 年 8 月 19 日～28 日	ソウル、慶州、釜山	52 名
2009 年 8 月 26 日～9 月 4 日	ソウル、統営、安東、釜山	53 名
2010 年 8 月 25 日～9 月 3 日	ソウル、原州、清州、釜山	53 名
2011 年 8 月 26 日～9 月 4 日	ソウル、昌原、順天、慶州、釜山	53 名
2012 年 8 月 29 日～9 月 7 日	ソウル、水原、大田、論山、公州、釜山	53 名
2013 年 8 月 22 日～8 月 29 日	ソウル、清州、春川、原州	50 名
2014 年 8 月 26 日～9 月 1 日	ソウル、春川、楊口、高城、清州、忠州、丹陽	50 名
2015 年 8 月 25 日～8 月 31 日	ソウル、全羅南道、京畿道、釜山	50 名
2016 年 7 月 12 日～7 月 18 日	ソウル、慶尚北道、仁川、釜山	48 名
2017 年 7 月 11 日～7 月 17 日	ソウル、忠清北道、大邱、仁川	49 名
2018 年 7 月 10 日～7 月 16 日	ソウル、慶尚南道、蔚山広域市、釜山	49 名

計 665 名

※2003 年度から 2017 年度は国際連合大学「国際教育交流事業」として、2018 度以降は文部科学省「初等中等教職員国際交流事業」として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが委託を受けて実施・運営。

歓迎晩さん会

慶尚南道教育庁

蔚山広域市教育庁

A グループ 学校訪問

海成国際コンベンション高等学校

昌原竜湖高等学校

金海大清中学校

B グループ 学校訪問

貞媛女子中学校

幸福学校

彦陽小学校

その他

高麗
蔘鷄
KOREA GINSEN

2018 일본교직원 한국방문 프로그램
2018 日本教職員韓国訪問プログラム

文部科学省委託 平成３０年度初等中等教職員国際交流事業

韓国政府日本教職員招へいプログラム　実施報告書

2019 年 2 月

編集・発行　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-32-7F　出版クラブビル
電話　　(03)5577-2853
Email　accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by WACO Inc.
ⓒ2018 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

Think Globally, Act Locally

ACCU
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

正誤表

下記のとおり、誤記がありましたので訂正いたします。

該当ページ	誤り	正しい
17 ページ	住田正治氏	住田昌治氏